325
443

始

活生の力

文學博士
前田慧雲
著

大正
5. 9. 12
内交

——著者小照——

若夫留名佳之匠
而不毫端心佛法
責之已而實用
盡力則進人道
焉

丙辰之秋　山舟居人題

序

人生は、或る力を以て、何處から何處までも精神を伸張して渉る樣に致したきものなり。世には、往々血氣にて伸張して往かうとするものあれども、無事無病の時に在りては、それにても宜しけれど、一旦、不幸に遭遇し、或は大病に罹り、事業の失敗に會ふことになると、血氣は兎角餒ゑ易きも

のなり。乃て人生の根本に對する健實穩當なる觀念を有して、それを以て善く精神を修養して、その力で伸張して往く樣に致すことが、最も肝要のことゝ思ふ。此篇は、先年或る處に於て、人生根本の觀念を作るべく、佛敎哲學の上より之を講演したものなれば、今回、實業之日本社の請に應じて、『力の生活』と題して出版することゝしぬ。

大正五年八月　　著者誌

目次

第一章　十方三世觀に基く處世……一—二〇

十方三世觀の意味……一
世界は缺陷なり……三
○娑婆と云ふ意味……四
不平や小言には限りなし……五
人心は圓滿なり……七
缺けた世界を心で圓くせよ……八
ましての翁……一〇
忍耐の極致……一一
心の持ち樣が大事……一三
青年の謬見……一五
心を和げよ……一六
聖德太子の御遺訓……一七
信仰は自然に心を和ぐ……一八

前篇　十方觀

第二章　平等觀……二一—五九

萬物一體の觀念……二一
心の同一……二五
二階に居て階下を知る……二七
千里眼……二九
感應……三三
佛心と凡心……三五
人と人との感應……三九
身裝よりも心裝……四一
萬物一體についての佛教の說明　四四
相對と絕對……四五
體の同一……三三
催眠術の實驗について……二六
天氣の豫知……二八
催眠術現象及千里眼についての說明・三〇
救濟の成立する所以……三三
富士山の天候……三六
赤心を推して人の腹中に置く・三九
物と心と同一……四三
消極的說明……四五
不可思議……四七

積極的說明……四八
世間の智慧と佛教の智慧……五〇
ランプの喩……五一
理窟で安心は出來ぬ……五三
自他の同一を觀するところより同情を生ず・五五
理論は分つて修養が無ければ駄目・五八
戒定慧の三學……四九
絕對智、般若……五一
相對智では物の本體は分らぬ・五二
安心を得る道……五四
世間は我有衆生は我身……五七

第三章　差別觀……六〇—九三

萬物悉く相異す……六〇
居るべき場所……六二
上下顚倒……六四
迷とは何か……六七
伏見人形……六一
土瓶と湯呑との關係……六三
花は紅柳は綠……六五
椽の下の力持となれ……六九

因果を無視する思想は危險…七〇
己れに出るでた物は己れに歸る…七三
親疎遠近の別……七五
楊子の無差別平等觀……七八
世界と我との關係……七九
世界ある故に我あり我がある故に世界あり…八二
宗教に進まなければ眞の道德で無い・八五
何故今日は恩を知らないか…八七
先生は月給取……八九
乃木大將の殉死……九〇
因果の理を信ずる道德の基礎…七二
陰德は何故尊いか……七五
五倫……七六
佛敎と耶蘇敎との相違……七八
萬波一水……八一
道德の基礎としての感恩……八三
信仰に立てば世界は一變する・八六
青年の無法なる考……八八
親は子を育てる者……八九
研究的態度に道德無し……九一

第四章　十方觀と修養……九四—一三八

差別と平等とを離してはならぬ・九四
「勿れ」の上に「爲せ」……九六
爲すあるの心爲さざるあるの心……九九
賴春水の父……一〇二
今の親氣質……一〇五
日本道德と佛敎……一〇七
佛敎より觀たる忠孝……一一一
武士道の根底……一一三
行基菩薩の歌……一一七
學校敎育で家庭の信仰を破壞なしては一二〇
不用意の遺產……一二二
敎師の懺悔……一二五
成功熱……九五
止持と作持……九七
昔の親氣質……一〇一
賢母子を誡む……一〇三
學問は金儲けの爲めで無い…一〇六
四恩……一〇九
我家の下女……一一二
武士道の精神と佛敎の信念・一一四
佛の信仰は哲學的理論を背景とす・一一八
子孫への賜物……一二一
用意ある遺產……一二三
財產と共に必ず宗敎の信仰を遺せ・一二八

後篇　三世觀

第五章　三世觀概說……一三〇—一四六

三世觀とは何か……一三九　二種の三世觀……一三二
儒教の三世觀佛教の三世觀・一三三　孔子の三世思想……一三四
孔子時代の三世思想……一三五　骸骨の物語……一三六
死は歸なり……一三六　故郷に歸る樂しみ……一三七
心から喜んでく者は天地間親のみ・一三八　人生至上の寶は親也……一三九
孔子以前の三世思想……一三九　聖賢君子は悉く未來を信ぜざるなし・一四〇
淺薄なる死生觀……一四一　松蔭先生の死……一四三
現代は何故斯くも淺薄となつ……一四四

第六章　儒教的三世觀（横の三世）……一四七—一六八

横の三世とは何か……一四七　先祖と我との關係……一四九
子孫と我との關係……一五一　自然界と人事界……一五四
儒教の因果說……一五六　因果を信ずべき理由……一五八
現今の道德の頽廢は因果撫に起因す・一五九　聖人の教の必要なる所以……一六一
太田錦城の天道說……一六三　福翁百話……一六三
善の爲めの善……一六四　自己の力を省察せよ……一六六
善を樂しむ境涯……一六七

第七章　佛教的三世觀（縱の三世）……一六九—一九三

佛教的三世の特色……一六九　諦らめ……一七一

天道是乎非乎……一七二
自己の本體は宇宙大……一七四
渦卷の内と外……一七六
坐禪觀念……一七九
佛教の三世觀は理論と實說と根據を有す……一八一
天台大師實驗の法……一八四
汽船を始めて見た話……一八五
六度修行……一八八
大悲常に我身を照らす……一九二
米國婦人の歸佛……一七一
宇宙大の自己が何故の如く現はれたか……一七五
業の力……一七八
浪靜まらざれば影を宿さず……一八〇
六卽の修行……一八二
前生を知る……一八四
因緣所成……一八七
修行と他力信仰……一九〇

第八章　三世觀と道德……一九四—二一一

不平を去る……一九四
他人の觀方……一九五

一切の男子は父一切の女子は母……一九六
日本道德の美はしかりし點……一九七
床しき夫婦の契……一九九
學者の愼しむべきこと……二〇一
恩を知るは大悲の本……二〇三
學問した者の注意すべきこと……二〇七
光圀卿の人形……二〇九
世々生々父母兄弟なり……一九七
楠公の死生觀……一九八
政岡の忠誠……二〇〇
知恩報德は道德の根底……二〇三
天下の大馬鹿者……二〇五
辨當の殘りの處分……二〇八
百丈の高風眞に仰ぐべし……二〇九

第九章　力の生活……二一二—二三六

打算的報恩は報恩に非ず……二一二
嬉しさの餘りの念佛……二一五
今日の學問と昔の學問……二一七
自力根性を棄てよ……二一三
信仰の人は人中の芬陀利華……二一六
臂机を離ること凡そ三十年……二一九

非常時の用意……二二〇
眞の信仰……二二二
心を虛しくして聽くを要す……二二四
治世産業皆是實相……二二六
速成信仰は用を爲さず……二二一
先哲の經驗を基とすべし……二二三
衣服と正體とを混雜するな……二二五

力の生活目次終

力の生活

文學博士　前田慧雲著

第一章　十方三世觀に基く處世

十方三世觀の意味

佛教の世界觀とでも言ふべきであるか、佛教に所謂十方觀三世觀と云ふことについて、之を一面には學問的に、一面には吾人の精神上の修養及び宗教上の信仰に結び付けて平易に述べやうと思ふのである。

偖て此の十方三世觀の、十方とは宇と云ふ意味であつて空間の謂であり、三世とは宙

と云ふ意味であつて時間の謂であるが故に、十方三世觀とは詮ずるところ宇宙觀或は世界觀と云ふと同じ意味と見て差支ない。然らば宇宙觀と言つたら宜からうとの疑問も出るであらうが、一體佛教に於ては宇宙と云ふ言語は餘り用ひない、從つて又經文などには餘り見當らない、大抵宇宙とか世界とか言ふべき場合には、十方とか三世とか云ふ文字が多く用ひられてゐる。のみならず通例宇宙觀と云ふてゐること、、私の述べる十方三世觀とは幾分意味合も相違してゐるのであるから矢張十方三世觀と云つた方が適切であるやうに思ふ。十方三世觀と言へば、どういふことであるかと直ぐ分る人もあるであらうけれども、中には、そんな堅苦しい難澁な語では分り兼ねると云ふ人もあるかも知れないから、一寸一言で申して見れば、吾々が、此の世界の人間とか此の世界の事物とか、さういふものに對して之れを空間的に如何に心得、又時間的に如何に心得べきか、その心得方を言ふのである。卽ち十方とは此の世界のことであるが、この世界に對して吾人は如何なる考を以て處すべきであるか、三世とは、過去、現在、未來、言ひ換へれば、吾人の生れぬ前、現に生きつゝある今、此世を去りたる後、さういふものに對して吾人は如何樣なる心得を以て向ふべきであるか、これを述べるのが私の十方三世觀である。要するに吾人人間として此の天地世界に對して如何樣に心得を向けて行つたならば宜いものであるか、其邊の處を佛教の立場から述べるのである。

世界は缺陷なり

一體人間が苦であるとか樂であるとか言ふのは、各自の心得方一つによるのである。心得方が惡ければ從つて總ての事が惡くなり、心得方が善ければ從つて總ての事が悉く善くならざるはないのである。樂と思へば樂と感じられ苦と思へば苦と感じられるのであつて、此の心の据ゑ樣、氣の持ち樣が至つて大切であらうと思ふ。修養書として近頃世間で持囃されてゐる菜根譚と云ふ書物の中に恁ういうことが書いてある。

『世界は卽ち是れ缺陷なり、人心は卽ち是れ圓滿なり、缺陷の世界を以て圓滿なる

人心を缺陷する莫れ。須らく圓滿の人心を以て缺陷の世界を圓滿ならしむべし。』

是れは、人の氣の持ちやう心の持ちやうによつて、世界はどうでもなると言ふことを敎へた極めて面白い語であると考へる。「世界は是れ缺陷なり」の、缺陷とは、かけおちると云ふ字で、一方が缺けてゐるとか凹んでゐるとか云ふ具合に、何處かに不足があつてまん圓るでない謂である。卽ち此の世界は何處まで行つても不足が附いて廻り、何處まで行つても不滿足が絕えぬ。だから是の世界は缺陷なりと言はざるを得ない。

娑婆と云ふ意味

之れは支那の語であるが、佛敎では此の世界のことを娑婆と言つてゐる、勿論この娑婆と云ふ語は印度の語であつて、日本語に譯すれば堪忍とか忍耐とか云ふ意味になる。何故この世界を堪忍の世界と云ふかと言へば、此の世界は何處から何處まで行つても不足が付いて廻り、もうこれでよいと云ふところがないから堪忍の世界である。堪忍が無かつたり堪忍を忘れたりしては暫らくの間も住むことの出來ない世界であるが故に、娑婆世界と云ふのである。それで娑婆とは詰り缺陷の世界と云ふと同じ意味である。精しく述べなくとも少し考へて見れば、この世界は實に缺陷に滿ちてゐる、不足に充ちてゐる、何處まで行つても、もうこれで不足はない、もうこれで不平はない、もうこれで滿足だと云ふやうなことのある譯のものでない。

不平や小言には限りなし

早い話が御維新前と今日とを比べると、旅行一つするにしても、どれ位便利になつたか測り知ることが出來ぬ。汽車もあれば汽船もある、人力車もあれば馬車もある、交通機關が四通八達して、何處を旅行するにも昔のやうにテク〳〵歩く必要もなければ、野呂間な輿や駕籠で搖られる必要もなく、居ながら何處へでも運ばれる。されば之れを考へると迚も今日は不平や小言を言へるどこの騷ぎではないが、いざ實際となると、これでも矢張不平も出れば小言も言へる。どうも汽船は乘降が不便だ、よし乘込んでも何だか一種厭な臭がして大變氣持が惡いとか、或は又、汽車は便利は便利であるけれども發

車時間が定まつてゐて、どうも窮窟でしやうがないとか、或は又、汽車もトンネルが無ければ誠に結構だが、どうもトンネルがあるので何とも言へぬ厭な思のするものであるとか、種々無量の小言や不平が付けられる。又東京などで電車の敷かれない時分には一寸出ても、つい車賃の三十錢や五十錢は取られて誠に迷惑したものであるが、扨て電車が出來て僅か五錢の端金で市内の何處から何處迄でも行ける今日になつて見ると、乘合人が多くて困るとか、人の多いのも我慢もしやうが箱ずしのやうに詰められて大變苦しい思がするとか、これ亦雜多な不平の種となる。斯樣な譯で、便利になればなる程益々不平の種が增して少しも滿足が出て來ない。のみならず吾々の境遇の上に移して考へても同じである。是々の金が儲つたら是々の物を買ひ是々の事をする、さうすればもう不足はない不平はない、大滿足であらうと考へてゐるが、それがさて儲かつて見ると、すぐ次に一つ田地が出來たらよからう、家が新しかつたらよからう、甚だしきに至つては、家族の中でも爺さん婆さんは何かと世話が燒けて困る、何とかして隱居でもして貰つたらまだよからうとなつて來る。さて家も建代へ田地も出來、老人も隱居したら、それで不足がないかと云ふと、老人の居ないのは結構だが、一寸外出するにも留守番の仕手がないから困る、子供の守に困ると、善きにつけ惡しきにつけ不平の絕間が無い。それであるから何處から何處まで行つても、この世界の事物に執着してゐる間は、これでもう少しの不足もない、もうこれで澤山、もう滿足だとは決して考へられないものである。故に世界は卽ち缺陷なりとは誠によくこの世界の眞相を喝破した言であると思ふ。

人心は圓滿なり

然るに斯くの如き缺陷に滿ちた世界から眼を內界に一轉すると、「人心は卽ち是れ圓滿なり」で、吾々の心と云ふものは圓滿で少しの缺目もなく、何一つ不自由不足のない至つて圓滿なものであることが分る。之れについて哲學の方からも仲々難しい理窟が付くが、又佛敎の方からも幾らでも高尙な理論が言へる。天台宗や日蓮宗にて一念三千と云ふは、此の道

理を示したものである、佛教は詰る所此の心の德を說いたものに外ならぬ。要するに修養次第でどんな善いものにもなり、どんな惡いものにもなる、「如何なるものでも具へて居らぬことなき廣大無邊のものが吾々の心である。」人間は何時までも人間に止まつてゐなければならぬと云ふのではない。修養さへ善ければ菩薩にもなり佛の境界へも進んで行けるが、修養が惡ければ人間に止まり得ないばかりか、或は畜生となり或は餓鬼とならねばならぬかも知れぬ。

缺けた世界を心で圓くせよ

斯樣に人間の心の中には、何一つ不足して居る、何一つ缺けてゐると云ふやうなことなく、如何なるものとても具へざるものとてはないのである。どう思ふても不足なものは不足に違ひなく、不平なものは不平に違ひないけれども、元々吾々の心の中には缺けてゐるものとてはなく圓滿であるが故に、我々の心の持ちやう氣の思ひやう次第で、不足の境涯に居りながら不足に思はず、不平の境涯に居りながら不平に思はずに濟まして行くことが出來る。吾々の心の持ちやう氣の持ちやう一つでどうでもなり行く處、其處が卽ち心の圓滿な處であり、缺陷のない處である。世界は缺陷があつても吾々の心は圓滿である。然るに吾々の心が缺陷の世界について廻つてゐると、何時の間にかその圓滿なる心までが缺陷してしまふ。故に吾々は心の圓滿を缺かないやうに注意して生活しなくてはならぬ。若し吾々の心が唯世界の事物にばかり氣を取られて、やれ日本の家は間取が惡くて困る、やれ自分の住所が不便だから困る、やれ家族に病人が絕えぬで困る、やれ貧乏で困ると云つた具合に、何かにつけて自分の境遇に許り氣を取られて小言を言つたり不平を竝べたりしてゐれば際限のない話で、あつたら圓滿なるべき心を持ちながら、それを不平や不滿に充さして缺けたものとしなければならぬ、誠に下らぬ次第である。さればこそ「缺陷の世界を以て圓滿の人心を缺陷せしむる莫れ」と古人も戒められたのである。缺陷なる世界であつても、吾々はこの圓滿なる心を以て缺陷の世界を圓滿ならしめる覺悟がなくてはならぬ。よく世間には寒くて困る暑くて困ると

て、兎角季候の不平を言ふ人があるが、若し寒かるべき冬が夏のやうに暑かつたり、暑かるべき夏が冬のやうに寒かつたりしたらどうか、先づ寒暑の不平を言ふ前に夏冬の季候そのものについて考へて見たならば、恐らく恁うした不平などは言へまいと思ふ。世の中は自分の心の思ひやう氣の持ちやうでどうでもなるのであるから、不足の境遇に居り乍ら不足を出さぬやう、缺陷の世界と知つてそれに滿足して行かんければならぬ。

ましての翁

これについて面白い話がある。以前近江の國に或る佛教の篤信者があつたが、その人は平生何事についても「まして、まして」と言つてゐたから、當時近所の人々は「ましての翁」と云ふ名前を附けてゐた。暑い日に人が道で出逢つて「暑いですね」と云ふと、その老人は「人間の世界でもこの位暑い、まして焦熱地獄はどの位暑いか知れない、地獄のことを思へば、この位の暑さは辛抱しなければなりません」と言ひ、寒い頃に近所の若い者が「大變寒いじやないですか」と云ふと、「寒いには違ひないが、世界の寒さでもこの通りである、まして八寒地獄にでも落ちたら、どの位の寒さか知れぬ、それを思へばこの位の寒さは我慢しなくてはなりますまい」と答へる。斯樣に何事についても生涯不平を言はず、始終人に對して「まして、まして」を連發して何時もニコ〳〵しながら生活してゐたから、人が本名を呼ばないで此の老人を「ましての翁」と呼んでゐたとのことである。之れが心の持ちやうである。この老人のやうな具合に心を持つてゐれば、暑い時でも、さう暑いと思はずに濟み、寒い時にも、さう寒いと思はずに濟む、從つて他人が佛頂面してゐる時でも、自分だけはニコ〳〵しながら誠に愉快の日暮しが出來るのである。

忍耐の極致

又伊勢の松坂邊に一人の感心な信者があつた。彼は未だ嘗て癇癪を起して人を怒つたと云ふことがない。世間の人が不思議に思ふ位堪忍の強い人であつた。所が或る物好きな男があつて、そ

の人の許を訪ねて「貴方は一向腹を立てぬ人であるが、どうしたらば、左樣に腹を立てずに居られますか、今若し貴方の歩いておいでになる後から、手桶に水を一杯入れて頭から引被せたらどんなものですか、その時にはいかな貴方でも、よもや默つてはお在でになりますまい」と言ふと、「イヤ〳〵そんな事位は何とも思ひません、俄かに道で夕立に出遭ふた位に思つて居ります」と答へた。仍て「左樣か、然らば石を貴方の頭に擲付けたならどうですか」と尋ねると、「不意に屋根から瓦が辷つて轉がり落ちたと思へば別に腹も立ちません」と答へたさうである。かやうな具合で、一生の間假りにも怒るの、腹を立てるのと云ふやうなことなく、誠に安穩な平和な樂しい一生を送つたさうであるが、是等は皆思ひやう次第、心得方一つである。世界のことは總て自身の心得方一つで、どんなにでもなつて行くものである。

心の持樣が大事

世間では煩悶と云ふことをよく言ふが、煩悶に慣するやうな煩悶であれば致方ないが、併し今日世間の多くの人、殊に青年の人の煩悶には、しなくともよい煩悶、又しても何にもならないことに就ての煩悶が頗る多いやうである。その結果遂には自殺まで敢てするやうなことになる。煩悶も矢張心の持方如何によつて、それを無くすることも出來れば益々多く起すことも出來る。例へば學生であれば、病氣に罹つて學問が出來ないとか、或は學問は出來るが同輩に先を越されたとかなると直ちに煩悶する。是等煩悶者の常として、自分の思ふやうに世界のことは一直線にやれるものだと考へてゐる。それであるからして、何かの事情でそれが妨げられると、全く狼狽して了つて方角が立たず、遂に煩悶懊惱となるのである。若しも彼等にして、大器晩成と云ふことを緊と心に置いて居れば、自分の思ふやうに出來ないとて決して猥りに煩悶など起す筈がない。又吾々が他人に對するにしても、吾々の心得方一つで善くもなれば惡くもなる。自分以外の者は悉く他人であつても、自分とは少しも關係ないものであると考へ、この五尺の身で以て五十年か六十年の生涯を送るそれが自分であつて、それ以外のものは自分と沒交渉な他人であると考へる

と、自然面白くない心が起り、惡い行が生ぜざるを得ない。然るにそれに反して、そんな小さいものが自分であるのではなく、日本人全體が同胞である、兄弟である、決して自分と關係のないものではないと、其處へ氣が付いてくれば、他人であるからとてさう不親切な事が出來やう譯はない、又自分の氣に向かないとて無暗に立腹したり喧嘩をしたり出來るものでない。又外國人に對してもその通りで、自分と全く無關係と思へば、つい水臭い考も生じやうが、自分と深い關係はないにしても矢張夫等の人の恩分を受けて生活してゐるのであると考へてくれば、決して惡感情を抱いたり、不正の行爲をしたり出來るものではない。萬事吾々の心得方一つ、心の持方如何によつて、この世界は吾人にとつて樂しくもなれば苦しくもなり、又善くもなれば惡くもなる。仍て佛敎では、吾人が世界に對し、又過去、現在、未來の三世に亘つて、吾々が如何樣に心得を有つて行けば、今世も安穩未來も安穩に行けるかを敎へてゐる。その邊のことを十方三世觀に因んで述べやうと思ふのである。

青年の謬見

今日世間の人は人生と云ふことを大變に重く論じもし考へもするが、その人生と云ふのは多くは五十年か六十年の自分の一生についての謂で、それ以外過去とか去來とか云ふ思想は、てんで頭になく、若し過去とか未來とか云はゞ、直ちに古臭いとか時勢後れとか云つて馬鹿にして了ふやうであるが、之れは大變惡い了見であらうと思ふ。一體生れぬ先きの自分はなくて、たゞ母親の體内から出た時初めて自分が生れたのであると考へて居つては、迚も親に孝行せねばならぬと云ふやうなことの分り得やう譯が無い。近頃の青年には無茶な理窟を云ふて得意がらんとする不心得の青年がある。彼等に言はせると、親に孝行は何故せんければならぬか、親が若し自分を生みさへしなければ自分はない、勝手に生んだのだから、そのため苦勞するのも養育するのも勝手で、何もそれが爲めに別に恩などのあらう筈はないなぞと飛んだ屁理窟を捏ねたがる。從つて又吾々の生れぬ先きの心の持ち方が現在の行爲の上に關係を持つて來ると云ふことも知らず、吾々

の死んだ先は烟の消えるやうなものであつて、人生とは六十年か七十年のものであると考へてゐるから、金を貯めて置いたところが田地を買つて置いたところが、死んだ後はどうなることやら分らぬ、そんな馬鹿々々しいことに苦心するよりか、生きてゐる間飲めや歌へやと面白くお笑しく暮したが増と考へてゐる人が隨分少なくないやうである。是等は少し考へて見れば實に淺墓なことであるのだが、かうした突飛の考を抱くに至る抑々の根柢は、彼等の有つてゐる世界觀人生觀が根本から誤つてゐるからである。それで先づ何よりも世界人生に對する心得方を根本から改革する必要があらうと思ふ。

心を和げよ

然らば心得方を如何樣に改革すればよいのであるかと言へば、先づ第一に心の底を和げて置かなくてはならぬ。心を和ぐるとは如何にするのか、骨を拔いた鰌のやうにするのかと云へば、決してさうでない。吾々の心を道理に叶はしめるのである。道理が四角であれば心も四角になり、道理が圓ければ心も圓くなる。かく道理のまゝになるのが、心の和と云ふものである。學問であれば、學んだ學問のまゝに自分の心が附いて廻つて、それと少しも衝突しないやうになつたのが心の和いだ相である。然らば心を和ぐるについて何が必要かと云へば、先づ何か愉快なことを以て心を溫めねばならぬ。譬へば水を冷やせば凍つて固くなるが、それを火で以て溫めれば直ぐ元のやうに自由自在の姿をとる水となる。恰度吾々の心もその通りで、理窟で以て冷やせば心は動かない頑くなゝものに凝結して了ふが、それを何か心を愉快にするもので溫めれば本來のまゝの和らかなものとなるのである。

聖德太子の御遺訓

聖德太子が十七憲法の冒頭に於て「和を以て貴しとす」と仰せられて、然らばその心を和げるについては如何にすればよいかと云ふことをお示し下されるために第二條に於て、「篤く三寶を敬へ」と仰つたのである。人間は何をするにも先づ心を和ぐる必要がある、心

が理窟で固まつてゐては仕方がない。その心を和げるために、佛法を信ぜよ、佛法を信ずれば、それによつて如何に凝結し切り冷却し切つた頑固な心でも自然に和いで、心の底から愉快が湧き出で、歡喜に滿ちた生涯を送れるのであると、畏くも千三百年の古へに於て聖德太子が日本の國民に向つて諄々と御教へ下されたのである。

信仰は自然に心を和ぐ

斯樣に心を和げるには先づその心を愉快に感ぜしめねばならぬ。心を愉快に感ぜしむるには宗教の信仰を獲なければならぬ。宗教の信仰と云ふても何でもよいと云ふのではない。吾々日本國民である限りは、日本に於て最も偉大な御方であり、又日本文明の基礎を御定めなされた聖德太子の御遺訓に從つて、宗教を信ずるのであれば佛教を信じなくてはならぬ。然らば佛教を信ずれば何故に心が愉快になり溫まつてくるのであるかと云へば、慈悲を以て心としてゐられる佛の極く溫かい情で以て、吾々の固いそして凝まつてゐる心が自然に溫められ和らげられてくるからである。故に吾々は心を和ぐるために何より

も先づ佛教を信じなくてはならぬ。佛を信ずるところに自然に柔和忍辱の心も出で來て、家庭にありても、社會にありても、國家にありても、世界にありても、調和がとれて、萬事圓滑に行くのである。今や社會一般に不眞面目な風が蔓延し、殊に知識ある中流以上の社會が漸次墮落して行くのは、畢竟彼等が佛教を少しも信仰しないからであつて、この儘で行くときは外面上それは隨分華やかにもなり所謂進歩も發達もあらうが、精神上に於て國家が破綻せぬとも限らぬ。この邊は充分國民たるものが反省して、精神上の工夫をする覺悟がなくてはなるまいと思ふ。

孔子曰。飯二疏食一飲レ水。曲レ肱而枕レ之。樂亦在二其中一矣。夫人之處レ世。莫レ急二於飲食一。又莫レ樂二於飲食一。而聖哲之於レ樂レ道。有レ甚レ焉。子曰。君子謀レ道不レ謀レ食。又曰。吾爲レ人也。發レ憤忘レ食。樂以忘レ憂。不レ知二老之將一レ至。又曰。回也。一簞食。一瓢飲。在二陋巷一。人不レ勝二其憂一。回也。不レ改二其樂一。賢哉回。看是皆是不レ急二人之所一レ急。不レ樂二人之所一レ樂也。畢竟其所二急且樂一。何爲物哉。亦甚奇怪矣。蓋賢不肖之分界。全在二于此一。宋周惇頤平日舉二示此章一。教二學者一看二孔顏之所一レ樂何事一。直是痛切矣。學者若知二其所樂之一事一。則侯鯖之珍味亦不レ如焉。至此始可二與談一レ道已。吾庫厨空乏甚枯淡。亦只以二彼一事之可樂者一充二本食一。呵々。——禪海一瀾——

前篇　十方觀

第二章　平等觀

萬物一體

佛教の思想で見たならば、吾々お互の身體を始めとして、その外畜類であるとか鳥類であるとか、或ひは植物であるとか鑛物であるとか、凡て此の世界に有りとあらゆる物は一體どういふものであらうか。　又相互に如何なる關係を採つてゐるものであらうか。之について先づ佛教の上では二つに分けて、卽ち萬物をその本質からと、現相からと兩方面より考へてゐる。先づ本質の上から見なければならぬ。人間の身體そのもの、本質、獸の身體そのもの、本質、鳥の身體そのもの、本質、植物そのもの、本質、それはどうい

ふものであらうか、皆悉く同一のものであらうか、或はそれとも別々であらうか、人間の本質は人間にのみ限つたものであらうか、植物は植物、鑛物は鑛物、或は鳥類とか獸類とか各々其本質は皆別々なものであらうか、或は又凡ての物の本質は少しも異ならぬ同じものであらうか。一體世界のありとあらゆる物の本質とはどんなものであるか。別々か同一かと云へば、佛教に於ては萬物同一と見るのである。勿論現はれたる相の上では、人間なれば人間、畜類なれば畜類、蟲には蟲の姿あり、石や金には又それぞれ特殊の形があつて、何から何に至る迄一々特殊の相はあるけれども、其の本質の上からしては、如何なるものも皆悉く同じ物同一の物であつて少しも異つたものでない。

體の同一

仍て先づ吾々の身體から云へば、それは心と肉との一つの寄り集まつたものに過ぎぬ。之れを世間の學問に於ては十四の元素の集合としてゐるが、佛教に於ては十四元素の代りに地水火風の四大元素を立て、之れを四大と云つてゐる。即ち宇宙間一切の物は皆この四元素より成立してゐると云ふところから特に大の字を加へて四大と云ふのである。吾々の身體もこの四大以外から出來てゐるのではなくして實にこの四大の集合である。四大をその性質の上から或は堅、濕、煖、動とも名付けてゐる。地は固まる力を有つてゐるが故に堅と云ひ、水は物を濕らす力を有つてゐるが故に濕と云ひ、火は物に熱を與ふる力を有つてゐるが故に煖と云ひ、風は物を動かす力を有つてゐるが故に動と云ふたのである。そこで地水火風と云ふても吾々の足で以て踏む土地のことでない、吾々が口に飲む水のことではない、堅濕煖動の元素のことである。かくの如き四元素を以て吾人の身體は構成せられてゐるのであつて、畢竟今日の科學が十四元素の構成を說くのと格別異つたところが無い。啻に吾々の身體が地水火風の四元素から成立してゐるのみでなく、鳥獸魚介の類より草木金石に至るまで萬物みなこの四元素の集合に外ならない。故にその本質よりせば、宇宙間の萬物悉く同一であつて些の異なるところもない。

それは餘りひどいではないか、人間と牛や鶏と同じものであるなどとは誣ゆるも亦甚だしいではないかと疑ふ人があるかも知れないが、少し考へればすぐ分る話で、吾々が牛肉を食つたり鳥肉を味つたりして、それが滋養物だなぞと云へる譯は、それを食つて吾々の身體となるからである。して見れば矢張牛肉も鶏肉も四大以外から出來てゐるのでない。のみならず大根を食つても午蒡を食つても、それが皆人間の肉となるところを見れば、これ亦大根午旁と吾々の肉體とが同一であると云はなくてはならぬ。人間は獸類の肉を食ひ或は菜や大根を食ふが、菜や大根は人間の不淨物を取つて成長する。斯樣に考へてくると人間の肉體と菜や大根とは本質に於て少しも異ならないものであることが分らう。もう一つ手近い例を取れば、塵溜の中には實に種々雜多な物が混合して投げ入れられてゐる、玉子の殼も這入つてゐれば、大根の切り端、葱の端、鶏の骨も鰯の頭も木の屑も紙片もある。所がそれを半歳も地中に埋めて置いた上で掘り返へして見ると、鶏の骨も出て來なければ鰯の頭も見えぬ、大根や葱の端は勿論のこと木の屑も紙の片も姿も形もなく皆同じ土になつてゐる。これから考へると、どれも皆同じものであると言はざるを得ぬ。仍でどうしても萬物が本質に於て同一であることは疑はんとしても疑ひ得ない。吾々の吐いた炭素を草木が吸ふたり或は草木の吐いた酸素を我々が吸ふたり、互に交換を仕合ふて行くものであるから總ての物が同一質であると云ふことは、理論上からは認めんければならぬ。して見れば一切の物その本質よりせば同一であることは極めて分り易い話と云はねばならぬ。

心の同一

然らば身體だけは萬物同一であるかも知れないが、精神即ち心に至つては皆別々であつて、何屋の何兵衛は却々賢い、何處の某は至つて馬鹿者である、何處の何作は怒りぽい、能く腹を立てる、隣りの老爺は笑つてばかり居る、これを見ると心だけはどうも同じであるとは言へない、萬人異つてゐるのであらうと考へる人があるかも知れないが、これも左樣に言へる譯のものではない。佛教では啻に身體の同一を說くばかりでなく、心に至つ

ても亦皆同じであると言ふのである。然らば同じ心が何故善人惡人と違ひを生じて來るのか、賢人と愚夫との區別を生ぜしむるのであるかと言へば、それは吾々の身體が別々な姿を取つて別々な事情に接して來るから從つて心の働きも異つて來るのである。身體の脆弱なものは心も薄弱、身體の强固なものは心も强健、境遇の順なるものは笑つてゐやうが、逆境に處する者は苦い顏をしてゐると云つた樣に、身體が人々によつて別々になつてゐるものであるからして、從つてその身體の上に現はれて來る心も亦自から別々ならざるを得ないのである。かく作用の上よりせば心は別々であるけれども、併しその本質よりせば權兵衛の心も八兵衛の心も賢人の心も馬鹿者の心も少しも異つたところはない。

催眠術の實驗について

今この心が本質に於て同じであると云ふことは、先づ早い所で彼の催眠術の實驗などを見れば容易に肯かれやうと思ふ。先年私は催眠術の實驗を見せて貰ふた事がある。それについて一二話して見やう。

二階に居て階下の人を知る

其時の場所は某大學の二階の講堂であつたが、先づ術者は會衆の中から一人を選でそれに術を施して置いて、然る後内々で他の會衆の一人をして階下の一室に入らしめて置いた。こうやつて置いて、被術者に向つて「今階下の何々の室に人がゐるからその人相等を見て來い、どんな人であるか」と問を掛けると、被術者は暫らく考へてゐるやうな樣子をしてゐたが、やがて「斯々の人相をした人であり、年頃は何歳位であると一々すら〳〵答へた。」仍で階下に隱れてゐた人を呼び出して二階の會衆の中へ席を取らしめて置いて、それから被術者に向つて暗示で以て術を解いて、「今催眠にかゝつてゐた間に尋ねた人が此の會衆の中にゐる筈だから探し當てゝ見よ」と云ふと、その人は早速「この人が階下にゐたのである」と云ふて巧く當てることが出來た。どう云ふ譯で催眠狀態に入ると、こんなことが出來るのであるか。若しこの肉眼で以て直接に見るに非ずん

ば物を見ることは出來ないとしたならば、二階に居て階下にゐる人の人相が分らう譯はないではないか。此處に何等か吾人の精神についての不思議が潜在してゐるのであると考へざるを得ないのである。今一つの實驗には次のやうなのがあつた。

天氣豫知

術者が被術者に向つて「明日の天氣は」と尋ねると「明日は晴である」と答へ、「明後日は」と問へば「明後日も晴である」と答へた。此日は四月の二十日であつたが、更に術者は「然らば來月の四日は」と尋ねると「その日は雨天である」と答へた。これを聞いた私は、何をよい加減のことを云ふのだ、天氣が分つて堪るものかと密に考へてゐた、併し驚くべきことには果して被術者の言の通り、明日卽ち四月の二十一日も明後日卽ち四月の二十二日も晴天であり、來月四日と云つたその五月四日は案の條雨天であつた。こんなことが一體どうして出來るのか、普通の考からすると不思議と申すより外に仕方がない、併しその不思議が催眠術に於て出來るのだからどうしても不思議と言はざるを得ない。

千里眼

更に近頃稀らしい事實あるを聞いた。千里眼の研究で有名な福來博士の處に近頃何某と云ふ千里眼を具へた人が寄寓してゐる。博士の話によると、この人は餘程驚くべき靈能を具へた人で、嘗て現はれた千里眼中最も確實にして最も偉大なる能力者であると云ふことである。知らるゝ通り千里眼と云ふのは催眠術とは違つて、何等暗示によらずにたゞ自分が精神を統一して了へば、其統一した精神の上に種々靈妙なる作用を現出するのである。で前記某は所謂千里眼卽ち透視と云ふて、例へば箱の中や罐の中にあるもので、どうしても吾々の肉眼で見ることの出來ないものを自由自在に見たり、或は念寫と云ふて、白紙に他人が要求する文字を現はしたり、寫眞の種板に文字を寫したりするさうである。のみならず念動と云ふて、たゞ精神を凝らし注意力を一所に集注したゞけで物を自在に動かす、例へば此の室にあるコップであるとか茶碗であるとかを前後左右に動かすのである。何でも博士の話によれば茶碗やコップ位なら小氣味よい位に

コロ〳〵と動かし廻ると云ふことである。この外念縛と云ふて、昔は不動の金縛と云ふて眞言祕密の一つにしてあつたことを某は矢張精神統一の力によつて行ふさうである。卽ち人の足を動かされないやうにしたり、手を動かされないやうにしたり、その外動いてゐる物を止めるさうである。例へば時計の振子位を止めるのは一向平氣であるとの話であつた。之れは尙更不思議であるまいか。催眠術は他人よりの暗示があるのであるが、之れは何等の暗示などを必要としないで、たゞ自分の精神を統一するだけで、上のやうな奇々怪々の作用を自在に現はすと云ふに至つては、吾々からしては唯だ奇蹟とか不可思議とか云ふより外に仕やうがない。

催眠現象及び千里眼についての説明

一體吾々の心は、こうして居れば唯だ何でもない小さい當り前のことにしか働かぬものゝやうであるけれども、實は不知不識の間に隨分廣く働いて居るものゝやうである。催眠術の場合に見れば、術を掛ける人だけが知つてゐて掛けられる人が少しも知らないことを、一寸した暗示だけで明らかに知り得るところを見ると、術者と被術者との間に何等かの心の交通が行はれるに相違ない。若し此の術者の心と被術者の心とが本質を異にしてゐるものであるとしたならば、假令どんな暗示を用ひた所で斯樣に心が雙方に映り合ひ通じ合ふ道理がない。して見れば之れだけについて見ても、明らかに吾々の心と云ふものは本質が同じであると言はざるを得ない。學者の說によれば、吾々の心には表と裏とあつて、平生働いて居るのは吾々の表の心だけであるが、催眠狀態に入ると平素働いてゐない裏の心がその作用を現はして來るのであるとのことである。而してこの表の心を顯在意識とか通常意識とか自知心とか名付け、裏の心を潛在意識とか次意識とか不自知心とか名付けてゐる。吾々が平生物を見たり聞いたり、學問をしたり、理窟を云ふたり種々のことをしてゐるのは所謂表の心であつて、自分の知つてゐる心であるから之を自知心と言ひ、其外に自分の心でありながら自分の知らない氣付かない心が何處にか潛んでゐる、それが催眠術などによつて出てくるものであるから、そ

れを不自知心と云ふのである。又前記千里眼のやうな場合に見れば、平生であれば迚も出來る筈でないことが精神を統一することによつて感覺を超越したる精神能力を現はして來るのであつて、福來博士の如きは之れを靈と名付けられて、人間の本心は此處にあるが、たゞ普通の吾々であるとか、平生の吾々の心であるとかすれば、外界の事情に蔽はれてその靈力が發揮されない、併し修行をすることによつてその靈が力を現はして來るのであると說明してゐられて、大變面白く感じられることである。所が佛教に於ては既に吾々人間に偉大な精神力のあることを認めてゐるのであつて、經文なぞには所謂神通力として種々の靈妙なる作用を現出し得ることが說いてあるのみならず、高僧と云はれた人の中には修行によつて隨分と不思議の神通力を感得して、それを實地に行づた人々もあるのであるが、從來は西洋流の科學思想萬能時代であつたから、若しや神通力とでも云へばそれこそ大變、直ちに佛教者の方便か手段でゞもあるかのやうに思つて、譯もなく頭から否定して掛つて見向きもしなかつたのである。所が

端なくも不思議の靈能者が現はれ、幸にも福來博士のやうな大家によつて今や却つて神通力の實存するのみならず學問上說明さへ付くとなつたことは實に面白い現象と云はねばならぬ。

感應

佛教では感應と云ふことを說いてゐる。感應とは、衆生たる吾々の心と佛の心とが相通じ合ひ相感じ合ふて、佛の心が吾々の心に映り、吾々の心が佛の心の上に映り、兩者の間に離るべからざる關係があると云ふことである。

救濟の成立する所以

佛が吾々衆生を何故救濟されるのであるかと云へば、佛の慈悲の心が吾々凡夫の心に映り得るからである。若し佛の慈悲心が吾々の心にどうしても映らないものであり、又吾々の心が佛の心に映らないものであるとしたならば、卽ち兩者の間に全く交渉がないとしたならば、如何に佛が救濟せんと思召しても救濟出來やう筈はなく、又吾々に於て如何に救濟に

與らんと願ふても救濟されやう譯はない。救濟の成立する所以は、佛心と凡心との間に密接なる交渉があり關係があるからである。例へば眞言宗の信仰であれば、「入我我入」と云つて、大日如來が吾々の心の中に入り、吾々の心が大日如來の中に入ることによつて悟りが開かれてくるのである。啻に眞言宗ばかりでない、佛敎である限りは、どの宗派であつても、斯樣な佛と凡夫との間の感應を說かないものはない。若しこの感應を認めなければ、其處には佛によつて救はれると云ふやうなことの言へる譯はないのである。若し佛の心と吾々の心とが別々のものであるならば、佛の方で如何に救はんと思召した處で、吾々の心が佛と同樣の心になつたり救はれたりしやう筈がない、互に心が感じ合ふからこそ吾々の心が佛に通じて、それを救濟せらるゝことも出來るのである。眞宗に於て「他力廻向の信心」と云ふてゐることは、佛の方からして吾々に佛の淸淨眞實なる智慧を賜はり、この智慧を賜はるからして、一生造惡と眞實の缺けてゐる凡夫たる吾々が淨土に生れて佛になれるのである。所謂「信心正因」で、信仰一つによつて佛と同體の悟を開くのである。何故佛となるのであるかと言へば、佛の方からして廻向をして下さる他力の信仰であるから其信心を我物とさせて頂くことによつて佛となるのである。故に眞宗の信仰とても決して感應の理以外に存する譯のものでない。

佛心と凡心との相異

然らば佛の心と凡夫たる吾々の心と少しも異ならないとすれば凡夫卽佛であるから、佛が佛を救ふとか救はぬとか云ふことは一體譯の分らぬ話でないかと疑を起す人があるかも知れないが、成程心の本質から申せば全然同じであるが、併しその佛の心と現はれ或は凡夫の心と現はれたる作用の上からすれば二者同じであるとは言へぬ。今之れを分り易い譬によつて述べて見やう。例へば天候は四圍の事情の變化次第によつては、雨ともなれば晴天ともなり、雪ともなれば風ともなる。併し晴天の場合も雨天の場合も天空そのものに於ては些の異なる所もない。

富士山の天候

富士登山をすれば分る。一日の中に麓では雨が降つてゐるにも拘はらず山巓には一片の雲すらないとがある。同じ日に、而かも一つ山でありながら、麓で雨が降り、巓で晴れてゐるのは何故であるかと云へば、麓には水蒸氣が多いから雨が降るのであり、巓の方になるに從つて水蒸氣が少なくなるから晴れてゐるのである。卽ち同じものであつても四圍の事情如何によつて或は曇りともなれば晴れともなるのである。然るに曇りの側に居る者には晴れの側が見えない。富士の裾野で雨に遭ふて山へ登つて行く時には、どう仰いで見ても上が晴天であるとは見えない。併し段々登つて絕頂に達して下を俯いて見ると、曇つてゐる處も晴れてゐる處も一目の中に瞭然として來る。あの邊は大變曇つて暗いやうであるから多分雨が降つてゐるのであらうと曇つた方の側がよく分る。凡夫と佛との違ひもその通りで、本質から言へば、心のみでなく體までも同一であるが、吾々凡夫に於ては、あれが欲しいとか、これが欲しいとか、或は誰れが可愛い誰れが憎くいと種々四圍の事情が曇つてゐるところより、遂に吾々が現にあるやうな迷の心と迷の身體とを現はして來たのである。所が佛は吾々凡夫にあるやうな曇り切つた四圍の事情を全然排斥して了はれた境界のお方であるが故に、從つて又その心に愛憎貪瞋癡と云ふやうな一點の迷の曇もなく晴れ渡り冴え返つてゐられるのである。それでその澄み切つた淸淨無垢の眞實心からして御覽になると、恰度富士の頂から下界を瞰下するやうに、吾々凡夫の曇り切り迷ひ切つた心の狀態が丸で手に取るやうに或は鏡に掛けて見るやうに瞭乎きりと見えるのである。斯樣に手に取るやうに凡夫の穢い淺猿しい心が見えるから、其處に何とかして、あの曇りを晴らしてやりたい、あの迷の夢を醒ましてやりたいと切ない大慈悲心が起つてくるのである。實に氣の毒なことである、可愛相な次第である、苦しいこともなければ悲しいこともないのに、小さい處に心を配つてゐて、有れば有つて苦しみ無ければ無くて悲しみ始終苦痛の絕間なしに藻掻いてゐる、どうかしてあの迷を掃ひのけてやりたい、あの夢を醒まさせてやり

たいと遣瀬ない大慈悲心が起つてくるのである。是れ佛が衆生濟度、凡夫救濟と云ふ處に誓を立て、おいでなさる所以であつて、この廣大なる大慈悲が吾々の上に始終働きかけてゐて下さるからして、吾々が佛を頼むことによつて救濟されるのである。斯樣に本質からは同じ心でありながら、一方の心は秋の空のやうにカラリと晴れ渡り、一方の心はドンヨリと曇つてゐるのであるが、曇つた凡夫の心からして佛を見ることは出來なくとも、晴れ切つた佛の御眼からは凡夫の心の隅から隅まで見えるからして、凡夫たる吾々が立派に救濟されることが出來るのである。斯樣に佛の救濟と云ふことは、啻に信仰の上からばかりでなく理論の上からも完全に證明出來るのである。佛の心と凡夫の心と、作用の上からは、卽ち現はれた上からは雲泥の相違があるが、併し本質からは同一であつて少しの相違もなければこそ其の間に感應が成立するのであり、救濟が可能であり、信仰が可能であり、從つて宗教が成立するのである。

人と人との感應

啻に佛の心と吾々の心との間に感應が行はるゝのみならず佛と佛との間にも亦凡夫と凡夫との間にも行れる。前に述べた催眠術の術者と被術者との間にも感應が行はれゝばこそ、術者の心を被術者がスツカリ知ることが出來るのである。催眠術ばかりではない、今現にこの書物を讀んでゐる方々と私との間にも感應が行はれてゐるのであつて、若しもそれが行はれてゐなければ、たゞ紙と文字とあつたればとて、私の言はんとする心の中が讀者の方々の心の中に通じ合ふ筈がない。昔から誠を以て交ると必ず人が服して來ると云つてあるのは卽ちこれ吾々凡夫仲間の感應でなくして何であらう。

赤心を推して人の腹中に置く

されば古人も「赤心を推して人の腹中に置く」と申されたのであつて、實に人と人との間に行はるゝ微妙なる感應の理を道破した千古の名言であらうと思ふ。赤心を以て向へば如何なるものも服せざるなき譯は、これ取りも直さずその間に最も有力なる感應が行はれるから

である。斯樣に吾々お互の間に感應が行はる、以上は能く注意して行かんければならぬことになる。このお互の間の感應を無視して顧みないと、商賣をしても思ふやうに繁昌もしなければ、又教育にしても政治にしても決して思ふやうな治績や教化が擧らない。之れに反して感應を善用すれば、商賣は益々繁昌し、教育は益々感化が大となり、政治は益々國民の信用を繫ぐことになる。處世上に於てもこの點を等閑にしないで自分に誠さへあれば、必ずそれは遲いか早いかの別はあつても何時かは先方に通ぜずしては止まぬ。若し通ずれば人から自然に心服もされゝば又尊敬も受ける。例へば人の訪問を受けた場合に、困つた者が來たなどと心に思へば、自然とそれが先方の人の心に感應して、その人は能うるられないで早々暇乞ひをして出て行くに相違ない。併し之れに反して格別お上手やお愛想を言はなくとも、格別御馳走をしなくとも、此方に能う來てくれたと云ふ誠さへ心にあれば、自然とそれが先方の心に感應して實に居り心地がよいから、い、機嫌になつて歸つて行く。その外何をするにも皆同じことであつて、例へば物を買うにしても格別お上手は言はないけれども何となく物の買ひ易い店もあれば、それと反對に澤山お世辭を並べ立てるが何となく買ひ悪い店もある。これ店に居る者の心の持樣が自然と客の心に感應して、一方は善い氣持を起させ、一方は悪い心地を懷かせて、何となく其處に商賣の繁昌と失敗とを生ぜしむるのである。其の外教育にしても政治にしても、世界の萬事は凡てこの感應の理によつて暗々裡に規定せられてゐるのであるから、これを粗末に思はないで何時如何なる人に對しても誠を以て臨まなければならぬ。

身裝より心裝

然るに世の多くの人は自分の心などが人に知られるものかと考へて、徒らに外見ばかり搔繕ふて中味の誠を虛にして置くのは實に淺薄と言はねばならぬ。外面ばかりに心を配つて肝心の心を虛にして置くものであるから、思ひも設けぬ失敗に難儀をしなければならぬのである。例へば早朝人の訪問を受けたとする、狼敗して床から飛び出す、婦人は勿論、男

子であつても、見苦しい寐巻の儘で會ふことも出來ないから先づ客を待たせて置いて、顔を洗ひ衣服を着更へ、それから面會するに相違ない。又婦人であれば尙更のこと、先づ顔を洗ひ鏡を見、髪が亂れてゐないかと注意し、それから衣物を着更へて萬事取亂したところのないやうに氣を配つた上で面會するであらう。これだけの心得は何人も注意して實行するのであるが、自分の心に至つては何等注意をするものがない。訪ねて來た人に對して自分は平生どんな心を持つてゐるか少しも考へたりしないで、外面は大層入念に取繕ふてゐるに拘はらず心の方は汚れたり崩れたり歪んだりしたまゝ一向平氣で出て行く。だから自分は少しも氣付かないかも知れないが、自分の心が感應の理によつて自然と先方の人に映じて、スッカリ先方に見破られて了ふのである。若し人が訪ねて來たらば、身體に氣を配るやうに心にも注意を向けて、彼は斯々の心を持つて斯々の用事で來たらしいが、自分は斯々の考へを持つてゐるから斯々の返答をすることが出來るとか出來ないとか豫め胸の中に考へて、然る後に會ふて話をすれば其の結果必ず間違や失敗は生じない。然るに此の方の用心は少しもしないで、たゞ徒らに外側にのみ氣を用ひて面會したり相談したりするものであるから衝突したり隙を生じたりして、遂には自分の心までが破されて想はぬ失敗を招くのである。斯樣に人と人との間にも微妙な感應が行はれるところを見ると、總ての人の心に共通するところがあつて決して別々なものではない、よし働は違つても其本質に至つては少しも異つたものでないと云ふことが分る。

物と心と同一

扨て肉體からするも精神からするも、自分の肉體と異つた肉體、自分の精神と違つた精神はないとしても、肉體と精神とは違ふであらう、即ち物質と精神とは違ふであらうと考へられぬでもない。併し之れもよく考へると、一應物質と非物質との區別はあれ、結局は物質と精神とさへ爾かく判然と區別されないのである。物質とは何か、地水火風から出來てゐる、地水火風とは何であるか、十四元素である、十四元素とは何物であるかと段々煎じ詰

め押し詰めてくると之れさへ薩張り分らなくなる。今は到る處電燈のついてゐないところはない、あれは一體何であるか、水の力が變じて火となつたのでないか、こうして見ると火から水が出るのか水から火が出るのか、それさへ一向分らない。この通りで、吾々は物質だとか精神だとか云ふが、これも終ひには物質か精神か、精神か物質かさへも分らぬこと、なつてくる。近頃精神療法と云ふことが大分唱へられて實際効果を擧げてゐると云ふことであるが、若し心と身體とが全然別箇のもので、その間何等の關係なしとせば、精神療法の行はれる譯が無い。昔より病は氣からと云ふてゐるが、實際吾々の病氣は尠くとも六分位は心の持樣で如何にでもなるらしい。斯樣に物質とは何であるか、精神とは何であるかと煎じ詰めてくると、遂には一向その間の區別さへも出來ないやうになる。

萬物一體についての佛教の說明

然るに佛教でも勿論或程度まで物と心とを別々に區別してゐるが、終局の所では畢竟この兩者が同一であつて違つたものでないと說くのである。つまり世界は悉く同一物であると云ふことになつて了ふ。所がその少しも異ならない同じものとは一體如何なるものであるか、此處になれば最早何れの學問も及ばぬのであるが、獨り佛教に於ては此處を二樣の方法によつて遺憾なく說明するのである。

消極的說明

その消極的說明よりせば、物質とは何であるか、精神とは何であるかと云ふやうなことは、吾々のやうな凡夫の計らひ知るべき限りでない、吾々の知識に掛るよりも、より以上のものである。何となれば、吾々の心は物を有の儘に捉へることは徹頭徹尾不可能である、物そのものを在るが儘に如實に認識することは出來ない。例へば暑いと思ふは寒いといふ考が頭にあるからである、寒いと思ふは暑いといふ考があるからである、又有るといふ考は無いといふ考があればこそ起り、無いといふ考は有るといふ考があればこそ起る。詰り暑といふ考も寒いといふ考も物の半分の考、有るといふも無いといふも物

の半分の考に外ならない。暑いといふ考と寒いといふ考と、有るといふ考と無いといふ考とを一緒に考へたり出來るものでない。

相對と絶對

之れを相對といふのであつて、吾々の心は何を考へるにしても何か一つの相手なくして、單にそれ自身について考へられるものでない。卽ち吾々の心は相對である、相對的作用しか出來ないのである。斯かる相對的の心を以て、絶對的の宇宙萬物の本質などを考へやうとしたつて考へられる譯のものでない。宅宙萬物は吾人の相對的精神を超越してゐるのであるから、其處は不可思議と云ふより外に仕樣がない。言語道斷心行處滅と云ふて、心に思ふて見やうもなく口にかけやう術もなく、心に思ふたら間違つてしまひ、口にかけたら誤つてしまふ。どのやうに巧に言ふても、どのやうに心を靜めて考へても間違つて了ふから、吾々相對の心で以て宇宙萬物の眞相を知ることは出來ぬ、之れを絶對と云ふのである。然るに佛とは實にこの絶對の境界に悟入せられたお方の謂であるが故に、吾々相對の凡心を以つて、思想に上すことも口に掛けて現はすことも出來ない。

不可思議

されば佛敎の經文には到る處に「不可思議々々々々」なる文字が澤山用ひられてある。口にかけ考に上せたら僞りとなり誤りとならざるを得ない。されば不可思議と云ふ文字を用ひたのである。然らば理論に行詰つて不可思議といふて誤間化してゐるのかと思ふ人があるかも知れないが、決して理論に詰つたのではなく、結局不思議といふより外に仕やうがないから不思議と言つてゐるのである。要するに相對を一歩も出ることの出來ない我々の心を以てしては、宇宙萬有の本質卽ち絶對の境界は到底知ることが出來ない、絶對を知るには絶對によらんければならないのであるが、吾々の心は絶對でなくて相對である、相對を以つて絶對を知ることは出來ないと消極的に說明するのである。

積極的説明

然らば佛教では遂に絶對は知り得べからずと消極的説明だけしか出來ないかと云ふと決してさうでない。其處に力ある一の積極的説明を附けて、不可思議絶對を思議し得べき方法を説くのである。而して之れが所謂自力の佛道修行といふものである。自力によつて若し佛となならうとするには、この不可思議、絶對を究むるまでの修行を積まんければならぬ。だから自力修行は難かしいといふのであつて、何も相對を知る位なら難かしいと言ふべき程でもない。不可思議の境界まで自分の心を修練しなければ佛を知ることは出來ない。平生物を有の儘に見ることさへ叶はぬ心を有つてゐて、而かも其の上朝から晩迄欲しい惜しい可愛い憎いの浪を心一面に起伏させながら、佛の境界を知らうとしたつて知れる譯のものでない。物を有の儘に見、自分の心の本體を究め、自分の身體を知らうとするには、平日使用してゐる相對の心を全く鎭めて了はねばならぬ。即ち煩惱の浪によつて搖られてゐる心を春の海のやうに靜めて了はねばならぬ。

自力修行戒定慧の三學

而して斯樣に吾々の平生の心を全く安靜にするためには、佛敎の自力の側に於ては、戒、定、慧の三學と云つて、三つの大修行を積まんければならぬとしてゐる。釋尊の御定めなされた規則通りに、身體も言語も心も修養せんければならぬ。所謂身口意の三つ共、戒定慧の規則通りに叶ふやうにしなければならないのである。近い所では故雲照律師の如きは戒定慧の三學の中に於て戒學を修行された方であつた。何故辛い思をして苦痛を忍んでまでも、そんな修行をしなくてはならぬかと云へば、今申す通り吾々の平素の心を鎭めて了はんければ佛を知ることが出來ないから、その心を鎭めるためにやるのである。心の浪を鎭めるには、先づ身體を規則によつて持せんければならぬ。朝早う起きるかと思へばお午頃まで寢込んだり、今夜徹夜して勉强したかと思へば明晩は宵の口から床についたりするやうな不規則無秩序の生活をして居つては、心を鎭めるは愚か忽ち健康を害はねばならぬ。健康を害つては心を鎭める所の話でない、そ

れでどうしても佛道修行するためには身體を規則的に持して行く必要がある。かく身體を規則通りに持して苟しくも不秩序のことをしないのが佛教に所謂戒法といふものであつて、佛教の修行では戒法が一番大切のこと、してあるのも尤もな次第であらう。

世間の智慧と佛教の智慧

戒法によつて心を全く鎭めて了へば、その靜まつた心の奥底から絶對の光が湧き出て來る。これ佛教に所謂智慧であつて、斯くの如き智慧が出て來ればそれは悟を開いたのである。吾々は無雜作に知慧と言つて了ふが、智慧にも種々雜多の種類があるのであつて、近時の學問で常識、見識、學識など、云つてゐる智慧と佛教の智慧とは全然その趣を異にしたものである。戒法によつて身を持し心の波を靜めてしまつて、その心の奥から湧き出て來た智慧こそ佛教の智慧であつて、それを佛教では世間の智慧と區別するために絶對智若しくは無分別智と名付けてゐるのである。

絶對智、般若

それで心を靜めるがために戒律を守り、戒律を守ることによつて全く心の浪が靜まつたところが禪定である。此の動搖しない平靜な心の上に現はれ出る智慧が、絶對智であり般若である。之を譬ふれば、洋燈の光のやうなものであらう。ランプに先づ火を點ずれば、風によつて炎が動搖するのは、恰度吾々凡夫の心が種々なる煩惱によつて動き廻り騷ぎ廻るやうなものである。

ランプの喩

火が動かないやうにするため火屋を掛けるのは、恰度戒法によつて身體を練り、以て心を靜めるやうなものである。火屋を掛けることによつて今迄動いた火が靜まるのは、恰度戒律によつて吾々の心が少しも動搖しなくなつたやうなもので、之れ禪定である。火屋を掛けない前は火が動いてゐるがために周圍が瞭つきりしなかつたが、今や火屋の德によつて明るくなるのは、恰度禪定の心の上に絶對智が現はれ出たやうなものである。斯樣に戒定慧の三つが揃へば自力の修行が完成したのであつて、其

處に始めて自分の心の本體を見ることも出來れば又佛の悟りを開くことも出來るのである。若しこの三學の修行が出來なければ自力の修行は駄目である。處が吾々のやうなものに於ては中々そんな偉いことがやれるものでないから、そこで自力難行と云ふのである。

相對智では物の本體は分らぬ

扨て自力によつて佛道を成ぜんとするには之れ程難しい修行を積まねばならぬのであるが、若しそれを積まなければ自己の本體も佛も分らぬ、卽ち絕對智を得ることは出來ない。たゞ書物の上の學問をして何程理論を捏ね廻しても到底物の眞相も自己の本質も究められたりはしない。學問によつて得るところの知識は、前に述べた相對心の上の知識であつて、之れを絕對智に比べれば實に淺薄なものであるに過ぎぬ。然るにかゝる淺薄な知識だけで以て何事でも究められぬことなしと考へてゐるのは大變な間違である。現今は此の種の人が多い、學校の教育や書物で得た知識さへあれば、どんな災難に出遭ふが、どんな悲しいことに出逢ふが、迷つたり烏呂付いたりはしないものと思ふてゐるらしいが、實際の場合に遭遇すると中々迷はないどころか狼狽しないどころか、こんな人間に限つて眞先に顏色かへて騷ぎ廻り、方角も方針も立たず、遂には悲觀の餘り氣が狂ふたり自殺したりしなければならぬのである。

理窟で安心は出來ぬ

學問や書物の上の知識といふものは我々の心の極く表面に付いてゐる知識であるが、吾々にはかゝる表面の心以外に、どれ位深い奥の心があるか測り知れない。だから一朝事に遭遇した場合、假令如何程表面の心で理窟を付けても奥の心が承知しない。例へば可愛い子供に先立たれたりした時に、人は何時かは死ぬものである、子と一生添はれるものでない、何時かは別れねばならぬ、兄の方が死んでも未だ弟があるなどゝ色々考へ廻し思ひ直した所で、中々心の靜まるものでない。よく可愛子供に死なれた人が言ふことであるが、他人が慰めてくれて、身體が大切だから餘り心配しないやうにとか、まだ

次の御子さんがあるからとか云ふ時には、一種腹立たしい氣がするとのことであるが實に尤もなことであらうと思ふ。一般の學問的知識からは、他人の慰める通りであり又自分にもさう思ふであらうが、併し奥の側の心がそれだけの理窟では承知しない。其の他思ひも設けぬ不時の災難に罹つて苦心して貯めた財産を一朝にして失つてしまつたりすると、中々平生得た學問上の知識や教育で以て諦らめの著くものでない。されば學問があるからとか知識があるからとて、如何なる場合にも安心してゐられるといふ譯には行くまいと思ふ。

安心を得るの道

それであるから、人生に處するに當つて何時如何なる變事に出遭ふても、狼狽したり方角を失つたりしないだけの修養をして置く必要があるのであるが、それには是非共吾々の心の奥に何か一つ強い力を有つてゐなければならぬ。若しこの強い力を有つてゐないと中々普通一片の知識位で納まりのつくものでない。然らばその力は如何にして得らるるのかと云へば、それは今述べた戒定慧の三學を修することによつて相對の心を靜めて了はなくてはならぬ。併しそんなことが、この吾々に於て到底企て及ぶことでないから、それには何か別の方法によつて精神の力を獲んければならぬ。併し自力修行以外に精神の強い力を得る方法があるか、無ければ大變であるが幸にもある。それは既に絶對智を究められた佛に信頼して、其處に吾々の相對の心を落付けて置けば、吾々の心は迷ふてゐても佛の心が確かであるがために、如何なる大事に遭遇しても泰然自若として心に滿足を感じてゐられるのである。吾々が精神上の力を得、精神上の平和を得るのは、唯だ此の方法あるばかりである。

自他の同一を觀するところより同情を生ず

扨て天地間ありとあらゆるものは、その本質からせば悉く同一であつて少しの相異もない、肉體の上からするも心の上からするも異ならない。のみならず物と心、即ち物質と精神とも一往の區別はあるが、その根本まで遡つて穿鑿すると遂には同じものに歸して仕舞

ふのである。故に萬物悉くその本質からすれば、少しの異なるところなく同一と云ふことにならんければならぬ。然らば之れを自分といふ立場から眺めるとどうであるかと云ふに、萬物が本質に於て同じであるとすれば、從つて自分と他の萬物と違ふとは言へぬ。卽ち自分を主として萬物を見る時、自分の身體より異なつた物、自分の心より違つた心といふが如きものが宇宙何處に行ても存しないとすれば、天も地も太陽も月も星も、その外人類、動物、植物、一切の物悉く自分の體內の物となつて仕舞ふ。かく萬物皆自分の身體以外に存するのでないといふことが分つてくれば、總ての物を取扱ふにも自分を取扱ふと同樣にしなければならぬといふことが分つて來べき筈である。自分の身體を抓つて痛い如く、他人の身體も抓れば痛いに相違ないと思はねばならぬ。自分が病氣に罹つて苦しければ、他人が病氣に罹つても同じやうに苦しいに違ひないと思はねばならぬ。自分が貧しくて辛ければ他人も貧しければ辛い、自分が金のあるのを愉快に思へば、他人も矢張金を有つて居れば愉快であるに相違ない、かく總ての物が自分と同樣であるとしたならば、總ての物を自分と同樣に思ひ自分と同樣に取扱はねばならぬと考へるは自然である。若し然か考へざる時には、既にこの點に於て自分の心に缺點があることに氣付くべく又以て反省すべきである。

> 世間は我有
> 衆生は我身

釋尊は「一切世間は皆悉く我が有なり、一切衆生は皆悉く我が子なり」と仰せられた。世界の總てのものは我であり、從つてその中に生息する總ての衆生は自分と同一である、卽ち自分以外に物は無いといふ心を以て世界に向はせられたればこそ、一切衆生を悉く自分と同じやうに解脫させたい悟を開かせたいといふ遣瀨なき無窮の大慈悲が起つて來たのである。

> 理論は分つても修養が無ければ駄目

吾々に於ては斯樣な理論を聞くと、成程萬物は同一である、自分以外に物はないのである、故に自分を取扱ふ如く萬物を取扱ふべきであると理論的には一應尤もであると承知もするが、

いざ實際となると直ちに萬物を同一と考へたり取扱つたりはしない、其處に直ちに嚴然たる自我の城を築いて、自己以外の萬物を頗る不公平に取扱ふものである。だから理窟で分つても、それを實際に行ひ得るには非常に修養を積まんければならぬ、即ち佛道の修行をしなければならない。然るに釋尊の如き修養も修行も完全に成就せられたお方にあつては、萬物が同一であるから一樣に取扱はねばならぬといふことは吾々に於けるが如き單なる空論でなくて、理論その儘が直ちに事實となつて、其處に始めて「一切世間は皆悉く我が有なり、一切衆生は皆悉く我が子なり」といふことが實驗上動かすべからざることゝなつたのである。所が吾々お互であれば何等の修行も修養も積んでゐないのであるから、それは何等事實としてあるのでなくて想像に過ぎない。早い話が其邊にある松葉の一を以て自分の頭髪であると考へることも出來ない、仍て萬物は皆自分の體內のものであり自分の身體以外に物は無いと理論だけ

では言ふことも出來れば又考へることも出來やうけれど、事實にそれを感じて、平生の行爲の上にも感じた通りを現はすといふやうなことは迚も出來ることでない。されば萬物一體であるといふやうな話は餘程修行の積んだ人ならば格別、吾々の上では餘り適切でなく唯だ屁理窟に過ぎないと考へる人があるかも知れないが、併し假令吾々に於ては行はれないとしても、萬物は同一であり自分以外に物はないと考へて行くことは、吾々の修養上甚だ大切であつて決して粗略に出來ないのである。若し此の五尺の身體以外の物は自分と無關係であり、自分以外の物は皆他人であり他物であると考へて行けば、つい自分さへ善ければ他人はどうでもよいといふ淺猿しい我利我利亡者になるであらうあるから、自分と萬物とは異なつたものでない同一であるといふことを實際上修養して行くことは吾々人間にとつて頗る大切であらうと思ふ。

第三章　差別觀

萬物悉く相異す

前章に於て述べた通り佛教では本質上からは萬物同じであつて少しの異つたところもないとするのであるけれども、その現はれた形、現はれた相の上からは、萬物一々悉く皆異つてゐて、何處から何處迄行つても全く同じといふものはないのである。今日世界には何億といふ無數の人間が居るか知れないが、その中のどの人間を捕へて來ても同じ顏をした人間が二人とあることはない。所謂瓜二つの譬のやうに大變似寄つた人はあるかも知れないが、矢張それは似寄つたといふまでゝ同一の顏であるのではない。何處か檢べて見れば違つたところが必ずある。何故なればそのやうに異つた姿や形が現はれて來るかと云へば、萬物皆各々原因があつて、それに何等かの事情が加はつて現はれて來

るからである。卽ち原因が異なり事情が異つてゐるところより、異つた姿をとり違つた形を現はして來るのである。假令同じ物で同じ原因があるにしても、時間が移ると早や四圍の事情が變つて來る。例へば同じ人が同じ物を造るにしても、二つ三つ造つてゐる中に、第一の物を造る時と第二の物を造る時とは旣に時間が違ふて來る、時間が違へば其の間には暑くなるとか寒くなるとかいふ具合に空氣の上に變化が起つて來る、されば同じ事情といふやうなことも嚴密にはあり得ない。茶椀を造るにしても、同一の茶椀を百なり千なり造り得るやうに吾々は思ふかも知れないが、併し仔細に吟味すると皆何處にか相異があつて決して同一の茶椀でない。斯樣に一切總ての物が、皆各々原因あつて、その原因に各々事情が加はり、各々異つた姿や形を取るのである

伏見人形

から、何處まで行つても姿や形の上から見れば、差別を離るゝことは出來ない。

彼の伏見街道を通る際に、伏見人形の竝べてある店を見て行く

と、その人形の中には、狐もあれば天狗もあり、布袋もあればお多福もあり、その他種種無量の有りとあらゆる形の物が竝べてあるが、どれを見ても同じものはない、形の上からは個々別々で皆違ふ。例へば同じ狐であつても尾の曲つた奴もあれば眞直な奴もあり、尾は皆曲つてゐても耳とか目とか違ふといふやうな具合に必ず何處か違つたところがある。澤山竝べられ、同じ種類の人形も何百となくあるに拘はらず、かく姿や形の上からは一々皆差別がある。然るに形や姿を離れて其の實質卽ち土といふ上から見たならば、狐であらうが天神さんであらうが、皆一律一齊少しも異つたところはない、皆同じものである。世界の萬物も亦この伏見人形と同じことで、實質からは宇宙間有りとあらゆるものが一つとして同じからざるはないのであるが、その形や姿の上からすれば、一つとして同じものはなく皆悉く異つてゐる、卽ち其處に千萬無量の差別があるのである。

居るべき場所

然るに萬物がかく姿や形を異にすれば、又それに應じて物各々その居り場所が違つて來る。何となれば、形や姿が違へば從つて働きが違ひ、働きが違へば又その居り場所が違ふのも當然だからである。

土瓶と湯呑との關係

同じ土製の土瓶と湯呑にしたところで、既に一は土瓶、一は湯呑と異つた形を取つた以上は、どうしても土瓶は湯を入れるもの、湯呑は湯を呑む物と其の働きが異ならざるを得ない。若し湯呑に湯を入れて置いて、それを土瓶に注ぎ、土瓶から直接に湯を呑んだとしたらどうか、之れは湯呑の働きも土瓶の働きをも無視したのであつて、若し斯樣な逆樣事をやる人を見れば吾々はその禮儀を心得ないことに驚くであらう。土瓶と湯呑と働きが違へば、又其居り場所卽ち位置も自ら異ならざるを得ぬ。土瓶から注ぐためには土瓶を湯呑の右へ持つて來んければならぬ、土瓶は注ぐべき働きを有つてゐるから湯呑の右へ來んければならぬので、何も湯呑の右に居るからとて湯呑よりも土瓶が尊いといふ譯ではない。然らば湯呑はどうであるかといふと、之れはどうしても土瓶の左に居るべきが

順序である。勿論順序を顚倒して土瓶を左に湯呑を右に置いて置けないことはないのであるが、かくすればそれは大變不自由であるに相違ない。斯樣な位置にあるまゝで若し湯を注がうとするには、一旦土瓶を湯呑の右へ持て來て、それから注がんければならぬ。啻に土瓶と湯呑ばかりでない、萬物が特殊の相を取つて現はれてゐる以上、皆各々働きが異なり、その働きの異なるにつれて各々居る場所が定まつてゐる。形の違ふにつれて作用が異なり、作用の異なるにつれて位置の違ふのは當然であつて少しも不思議でない。

上下顚倒

萬物には形に卽して作用の相異あり、作用に卽して位置の相異があるのであるが、然らばその位置の相異によつて、一は貴い一は賤しいと貴賤上下の區別が生ずるかといふに、一往其の位置や作用の上に就て云へば、貴賤上下の差別はありはすれども、其本質上から云へば形が違ふから働きが違ひ、働きが違ふから居り場所が違ふまでゞあつて、別に上に居るから偉い、下に居るから詰まらないと云ふ譯のものでない。各々働きの相異に卽して自然に居るべき場所に居るのであるから、一方が貴くて一方が賤しいのではない。上に居るものはその形その作用に相應した勤めをして天職を盡して居るのであり、下に居るものは又その形その作用に相應した勤めをして天職を盡してゐるのであつて、天職を盡す點から見れば、一が貴くて一が賤しいと云へる譯のものでない。湯呑は土瓶の左に居るから賤しうて、土瓶は右の方に居るから貴いのだとは言はれまい。斯樣な位置に居ればこそ、土瓶は土瓶、湯呑は湯呑の職分が果せるのであつて、その職分を盡す上から何れも同等である。之れが若しも反對に土瓶と湯呑とが位置を顚倒して居たならば、それこそ大變で、どちらも職分を盡すことが出來ない。法華經の中にも

> 花は紅柳は綠

「法、法位に住す」と云つてあつて、萬物は各々その居るべき位置にあつてその作用を完全に果すが故に貴いのである。彼の禪宗で「花は紅、柳は綠、山高く、河流る」と言つてゐる

が、之れは畢竟萬物が天より定められた場所に居つて、定められた職務を盡して行くその儘が取りも直さず佛の働きであり、佛の現はれであり、眞如法性に適ふてゐるのであるといふ意味を含ませた語である。それと同じく吾々人間に於ても、その居るべき位置に居り盡すべき職務を充分に盡して居れば誠に天下は泰平であつて、親子の間にも夫婦の間にも兄弟の間にも、さては他人との間にも何等爭ひの起らう筈なく、從つて自分も常に愉快々々で生活出來るのであるが、扨て實際となると却々さうはいかぬ。上に居るべきものが下に、下に居るべきものが上に、或は主人たるべき者が奴僕のやうな所作をしたり、奴僕たる者が主人のやうな眞似をしたり、兄たる者が弟の下につき、弟が兄の上に行き、夫たるものが妻の語に左右され、妻たる者が夫を出し抜いて出しやばり、親が親としての權威なく、子たる者が子としての本分を盡さぬ、これでは眞如法性に適はない所が、丸で上下顚倒、物の逆であるが、併し之れが今日我々人間世界の一般の有樣である。花は紅、柳は綠といふやうな具合に、各々居るべき所に居り賦與された職分を盡してゐるのであれば佛の悟の境界のまゝが現はれたとも言はれやうが、何故人間に限つて、花や柳が天然の色彩を發輝し、山や河が自然の儘にあるやうに、その分を守つてゐることが出來ないのであらうか。人間獨り出來ない譯のあらう筈はないにも拘はらずそれが出來ないといふものは、何か其處に原因が無くてはならぬ。この原因こそ佛敎に所謂迷と云ふところのものであつて、吾吾はお互に迷つてゐるからして、この人間世界に限つて上下顚倒した狀態を現出してゐるのである。

迷とは何か

然らば迷とは何であるか。迷とは萬物が本質に於て同じであるといふことに少しも氣付かないで、唯だ萬物の現はれ出でた形や姿の差別の上にのみ目を向けてゐることである。吾々は差別の方面ばかり目を付けてゐると、當然自分より以外の者ばかり目に映つる、卽ち萬物悉く自分にとつては他人として映ずるのである。扨てこうなると他人の事は棄て、

置いても、唯だ自分さへ宜ければよいと云ふやうな淺猿しい煩惱が起つて來る。この煩惱のあるがために、或は山の如く、或は河の如くに、自然に居るべき場所に居て自然に行ふべき働きが行へないことになるのである。この煩惱を除き去らんことには萬物一體の感じなぞは迚も生じやうがない。然るに若しも萬物の一體であることに氣付けば、自分は力及ばぬが故に下に居り、彼は力が偉れてゐるから自分より上に居るのであると各々其天分に安住して少しの不平不滿もなく、誠に平和に生活が出來るのである。所が實際になると中々さうは行かない、不平や煩悶が多くなるのは、畢竟眞理に暗くして迷つてゐるからである。それで迚も萬物を一體と觀ずるやうな高尚の境界になれないとしても、せめて商人は商人、百姓は百姓、教育家は教育家、政治家は政治家、其他何であらうと、自分の天職を一生懸命勉めつゝ、不平や小言を言はずに生活して行けたらそれこそ貴い人間であり、又偉い人である。所が自分の爲すべきことを爲して、それで知らぬ顔をして平氣で暮すといふことは、これ亦却々容易に出來ないことであつて、普通の人間であつて見れば、天職を幾分か勉めると、直ぐ何か自分は特別人と違つたことでもやつたやうに思はれて、つい自慢がしたくなり廣告がしたくなるのである。このやうな、さもしい心が起るからして眞の仕事が出來ないのである。若し各自が自分の職分を盡すそのことによつて自ら安心してゐられれば甚だ結構であるけれども、聊か天職を盡す眞似でも出來ると鬼の首でも拔いたやうに得意になり、他人に向つて吹聽したいやうな心が起つて來るものであるから折角遣り掛けた仕事も充分完成出來ずに終るのである。

椽の下の力持となれ

人が知らうが知るまいが、そんなことを頓着せず、自分の爲すべきことを爲してゐる世に所謂「椽の下の力持ち」といふことは大變尊いことであるけれども、之れが中々吾々人間にはやれない。何か仕事らしいことでもすると、直ぐ他人に知らせたくなり公にしたくなる。これが人間には一番忌むべきことであるけれども而かも一番避け難い。他人に見られ

たい、知られたいと思ふ心が起ると、もうそれが抑もの落で、進歩所か漸次退歩し墮落するのである。されば佛道修行に於ても驕慢を重罪として強く戒めてある。人が知らうが知るまいが獨り所謂椽の下の力持ちをして居れる人間は中々得難いものであるが、併し吾々は此處まで修養せんければ到底眞人間とはなれないのである。殊に今日の時勢は萬事廣告めいたことが流行してゐるのであるから、どうも事業をするにも眞摯が出ない。不思議なもので、自分から自慢したり吹聽したりしなくとも、ほんとうに眞摯にやつてゐる仕事であれば、自ら求めずして認められ、自ら焦慮らなくとも必ずその事業は他の補助を受けて繁榮して來るのである。この點は特に現今のやうな時代には互に反省して愼しまなければならぬことと思ふ。

因果を無視する思想は危險

近頃の學者の或る者とか又多少知識ある人間になると、善事をしたつてよい結果があるとか、惡事をしたつて惡結果があるとか云ふのは、それは自然界の因果關係を人事界に應用して、人に善を勸め惡を懲らさせるための方便に過ぎないのであると言ひ、或はそう考へてゐる人が尠なくないやうであるが、若し斯樣な說に感化されたならば、誰れも椽の下の力持ちといふやうなことを馬鹿らしがつて、投機的のことばかりやるやうになりはしないか。一體この人生が歪なりにでも動物のやうな生活とならないのは、其處に因果を信じて椽の下の力持ちをしてくれる有難い尊い人が多少なりあるからであるが、若しも今の學者の言ふやうに誰も椽の下の力持ちを馬鹿らしがつてしないやうになつたら恐らく國家も家庭も社會も在つたものではなからうと思ふ。學者その人では大變立派な說でゞもあるやうに考へてゐるか知れないが、これ位世の中にとつて危險思想はないのである。勿論修養の積んだ人にとつては、善事によつて善い報いを得やうの、惡事には惡い結果があるから爲すまいのと、そんな淺猿しい動機から自己の天職を力めるのではないけれども、それは餘程修養の高い人の話であつて、普通の人間にとつては矢張り善い事をすれば何か善い結果があらうと豫期し、惡い事をすれば惡い

結果があらうと恐れ慎しむのが人情の常である。然るにそれにも拘はらず、善い事をしたつて善い果報のあつたり、悪事をしたとて悪結果を招いたりするものでないとなれば、たゞさへ人の好まない椽の下の力持ちといふやうなことは馬鹿らしくて誰れもやらないとなつたらどうか。その邊の深い考へもなくして徒らに出任せの無責任な空論を喜ぶやうなことは、特に學者たるものゝ深く戒慎しなくてはならないところであらうと思ふ。

因果の理を信ずるは道德の基礎

善因樂果、悪因苦果の因果法を無雜作に否定する人には、前に述べた感應といふことが全く分つてゐない爲めであらうと思はれる。若し感應の理について聊かなりとも知つてゐたならば、さう無雜作の言論を敢てし得られやう筈が無い。人が知つても知らなくてもそんなことは頓着しないが、兎に角善事をすればそれに對する善事が何時か集まり來り、悪事をして置けば何時か悪事が自分の身に巡り來るのが感應の理であるが、之れを少しも知らないといふと、今のやうな無鐵砲の危險思想が湧き起るのである。人間の心と心とが互に相應じ合ひ通じ合ふものである以上、假令ひ自分の名を出さなくとも、又他人に知られなくとも、慈善を行へば、慈善を受けた人は必ず非常に悅び、何處の誰方であるか知らないが、斯樣な惠みを垂れて下さつたお蔭で今日は吾々が安穩に暮せたのである、誠に有難い辱けないといふ感謝の念を必ず起すに相違ない。然るに慈善を受けた人の此の感謝の念、滿足の心は、たゞそれだけの當座限りのものとなつて消えてしまふものであらうか、唯その人の頭の中に止まつただけで濟むものであらうか、他に向つて少しも影響も及ぼさず感應もしないで居るものであらうか。

己れに出でたるものは己に歸る

精神上のことは吾々の目に明かに見ることは出來ないけれども、働きのある以上必ず甲も乙も互に相共通し相作用するものであるに相違ない。一方が悅びの念を起せば必ず他方に影響を及ぼし、之れと反對に一方が立腹すれば他方にも必ずその影響を及ぼさずしては止む

まいと思ふ。されば人に慈善を施せば、受けた人の喜びは屹度施した人に向つて影響を及ぼさずには置かない。名も出さねば人にも知らせず、誰れの恵んだ物であるやら一向分らないやうな場合には、何等影響も無さそうであるが、その實、感應の理は不思議なもので、必ず影響なくして止むといふやうなことはない、即ち此方から出したものが何かの形で此方へ戻つてくるのである。一方が悦ぶとか怒とかいふやうな場合には、先づ因縁の最も近い方に一番強く影響して來る。だから吾々が人の知らぬ時に善い事をしても、それが何の役にも立たぬといふ道理もなく、又人の知らぬ時に悪事をしてもその報いが無いといふ譯のものでもない。縱令ひ他人が知つても知らなくても、善事或は悪事を爲せば、必らず何處かに影響して、そして何處かに影響したその影響は何時かは自分の上に歸つて來るのである。彼の儒教に「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」、と言つてゐるのも、つまりは此の感應の道理を說いたものに外ならない。若しこの感應の理を認めなかつたならば、儒教の道德にしてもそれは決して徹底的に行はれはしない。吾々がこの感應の理を心得てゐたならば、人が見てゐないから働いても詰らぬとか、自分の名の現はれない處へ慈善をしたつて功能がないとか云ふやうな考は毛頭起り得やう筈がないのである。

陰德は何故尊いか

昔から隱德を極めて貴いこゝして尊重し、隱惡を非常な悪事として嫌つてゐるのも實にこの道理があるからである。それで感應の道理を充分心得て行つたならば、前に言ふた椽の下の力持ちといふことも出來ないことはあるまいと思ふ。若しこの考が丸で頭にない人であると、人の前であるとか人の前でないとかいふことだけが常に自分を左右して、迚も椽の下の力持ちといふやうな殊勝な心懸は微塵も起り得ないのであつて、何事をするにも自己に忠實な眞面目を有ち得なからうと思ふ。

親疎遠近の別

扨て萬物はその姿や形を異にすれば從つて働きを異にし、働きを異にすれば又從つて居るべき場所に區別があるのは當然で

ある。この理に從つて吾々はその居るべき場所に居り、その執るべき職分を執つて飽迄そのために盡して行かんければならぬ。斯樣に各々が差別の形を取り、差別の働きを現はし、差別の位に居れば、萬物の間には又差別ある關係を生ぜねばならぬ。即ち甲と乙とは甚だ親密であるが、丙と丁とは餘り親密でないとかいふやうな具合に、各各の間に遠近親疎厚薄の關係を生じて來る。例へば今此の處に集りてゐる御人は私と近く親しくある故に互に愛敬の心を生ずる、此の處に來てない御人は私とは遠く疎くある故に相互の間に愛敬の心は起らない、斯樣に總ての物に一々親疎、遠近、厚薄の關係が現はれてくるのである。依て吾々人間と人間との關係に於ける差別は充分明らかにして置いて、苟しくもその關係を無視してはならぬ。若しこの差別を無視すれば所謂惡平等に墮するのであつて人倫を破るものと言はねばならぬ。

五　倫

彼の儒教で說く五倫とは畢竟この親疎、遠近、厚薄の關係を明かにして、その間に守るべき人間の道を敎へたものに外ならないのである。即ち君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友とその間の關係が一定して居り、從つてその關係に於て守るべき道が定まつてゐて、苟しくも吾々が世に處する上に於てこの關係を無視したり混同したりしてはならぬ。先づ國家の上について考へて見ても、日本の　天皇陛下と吾々との關係が吾々日本人にとつての君臣關係であつて、吾々は苟且にもこの關係を粗略にしたりしてはならぬこと勿論である。同じ君主といふても王といふても、世界には英國の天子もあれば露西亞の天子もある、けれども吾々日本人にとりて最も緣の近い天子と云はゞ畏れ多くも日本の　天皇陛下より外にはましまさぬ。露國や英國の天子は天子であるに相違はないが、吾々日本人にとつては緣の遠い關係の薄い天子である。そこで吾々日本人は一番自分と關係の深い緣の近い日本の　天皇陛下を戴いて、その御命令に服し、何處何處迄も忠義を勵むべきが吾々にとつての國民の務めとなるのである。又一軒の家にとつて考へて見ても同じことである。自分の親は飽迄隣りの

人の親と區別して孝行を勵まなくてはならぬ。

楊子の無差別平等論

支那の楊子といふ學者は自分の親も隣りの人の親も親に變りはないから同一に仕へねばならぬといふてゐるが、こんなことになつたらそれこそ大變、親疎の關係は破れて忽ち社會の秩序は亂れて了はねばならぬ。自分の親も自分の兄弟も自分の妻子も、他人の親、兄弟妻子と何等違つたところがないなぞとは無茶苦茶な話である。吾々は此の親疎、遠近、厚薄の差別を充分心得て、その取扱ひを一々區別することを忘れてはならぬ。そこで始めて人倫も成立するのであり道德も成立するのであつて、若し楊子の云ふやうにこの關係を無視したならば道德も人倫もあつたものではない。

佛敎と耶蘇敎との相違

佛敎は一面萬物が本質上一體であるといふ平等の方面を說くと同時に、直ちにそれに卽して萬物となつて現はれ出でた上に於ける差別の尊重すべく大切にすべきことを敎へてゐるのであるが、耶蘇敎に於てはどうもこの差別の敎へが粗末にされるものだから我國體とは一致しないのである。人間は皆一樣に神によつて造られたものであるから神の前には平等であると言ふ論法を押し詰めて行けば、忠義と言はうが孝行と言はうが薩張り理窟に合はぬ譯の分らんことになつて了ふのである。天子も親も吾々も皆神の造られたものであるから神の子として少しも差別がないじやないかとなれば、社會の秩序も人倫もあつたものでない。だから、この親疎、遠近、厚薄の差別を能く心得て、それを苟且にも紊さないやうにするのが道德上最も必要であらうと思ふ。

世界と我との關係

形や姿の上よりせば總て皆差別があつて同じくはないが、併し萬物が個々別々に孤立してゐるのではなくて、その間に關係も聯絡もある。何となれば萬物とは同一本體が原因と事情との差別によつて各々異なれる形を現はし姿を取つたものであるからである。卽ち原因の異なるに應じ事情の變れるにつれて、萬々個々の姿を執つたのではあるが、その個々

は齊しく同一本體の顯現なる點に於て互に相關係し相聯絡してゐるのである。然るに若しも個々の物は皆單獨に孤立して其の間に何の關係もなく、唯だ偶然に集り合ふて以て世界が構成されてゐるのであると考へると、自分と他の人及び他の物との關係が全く分らなくなつて了ふ。唯だ居る處の位置によつて親疎、遠近、厚薄の差別的關係を生ずるまゝで、物と物との間に必然的關係なく、偶然に相寄り相集まつたのに過ぎないと考へられぬこともないが、併したゞそれだけのことであつては、我々が相互に持ちつ持たれつしてゐるものであるといふことは分らない。君臣、父子、兄弟、夫婦朋友などの關係は、たゞ差別の形として現はれ出でた上での關係であつて、その間に何等深い根本的關係のあることを認めないならば、それは關係があるといふても偶然の關係に過ぎないことゝしか考へられぬであらう。然るに佛教に於ては、かゝる差別的偶然の關係のみを說くのでなく、もつと深い、もつと根本的なところから所謂切つても切れぬ親密の關係が存するものであることを說くのである。卽ち總ての物が同一本體より顯現して、或は自分となり親となり兄弟となり萬物となつたのであつて何物と雖も自分と關係しないものはない。

萬波一水

例へば、海を見れば一面に所謂大濤小濤高低起伏してゐるのであるけれども、その中の如何なる一波と雖も孤立してゐるものはない。一つの波が起れば必ず又他の一の波が起り、段々それからそれへと海全體に波が起つてくる。此故に東京灣に起つた一波と、太西洋さては地中海に起つた一波とは無關係でなく、其間に必ず何等かの關係を持つてゐる。世界の萬物も亦海の波と同じであつて、一物と雖も他と交涉なく關係なくして存在するものはない。故に自分一人が在るのではなく、世界全體があるから自分が在るのであり、又それと同じく自分があるからして世界全體が在るのであり、自分を除いた別の世界といふやうなものは存在しない。自分が現に今かくして存在するのは、住んでゐる町なり村なりがあるからであるが、そればかりでない、諸府縣卽ち日本全國が在るから

である。然らば日本は此の日本だけで出來たかといふと、そればかりではない。英、米、獨、佛、その他世界の何れの國も在るからして、今の日本が現はれて來たのである。

世界あるが故に我あり我あるが故に世界あり

斯樣に段々押し詰めて行くと、世界全體が今日のやうに現はれた上に今日の我といふ一人が現はれてゐるのである。夫れと同じく世界からして我といふ一人をも除却することは出來ない。一人が總ての世界に關係あり、總ての世界が一人と關係を保つてゐる、我々の今日の生活は世界全體から恩惠を受けて居るのである、從つて又それと同樣に我々の働きを世界全體に及ぼして行くことも出來るのである。卽ち世界と自分とは、どうしても切り離すことの出來ない關係の絆によつて堅く結びつけられてゐるのであつて、世界の何一つ缺いても今日のやうな世界を現はすことは出來ない。この點から見れば世界全體の物が一々互に恩を蒙り合つてゐるのであつて、世界全體の如何なる物に對しても決してそれを粗末に思はず感謝の念を以つて對せねばならぬことゝなる。所謂御恩報謝の念が起らねばならぬ。この御恩報謝の念が些かでもあれば、他に對して腹を立てたり、怒つたり、怨んだり、欺いたり、嘘を言つたりするやうな總ての不德義は迚も出來る次第ではなからうと思ふ。斯樣に自分と世界全體とが深い關係のあることを知るならば、どうかして少しなりとも受けた御恩に對して盡さねばならぬといふ考が起つて來べき筈ではないか。

道德の基礎としての感恩

一體道德なるものは、理窟一天張で少しも有難いとか勿體ないとかいふ感恩の念なくして、それで以て徹底して實行出來る筋のものでない。感恩と云ふやさしき心を外にして、うるはしい道德心の起り來る筈がない。總ての物から盡きせぬ御恩の數々を受けてゐるのであるから、せめて拙いながらも自分の力で以つてその萬分の一なりとも報いねばならぬ感謝しなければならぬといふ心掛を持つてゐて、始めて美はしい道德も充分行へるの

である。かく申せば、人間は誠に變なもので、成程自分も御恩を受けてゐるやうであるけれども、自分も幾分か世界に務めてゐるのであるから、つまり五分々々の關係で、別に特に自分だけが御恩を受けてゐるとか、感謝しなければならぬとかいふことはないでないとか考へたくなるものである。だから理窟の上から何程吟味して見ても詮索して見ても、他の者から恩を受けお蔭を蒙つてゐる、誠に有難いと云ふやうな素直な心は起つて來ない。卽ち總ての物から恩を受けてゐるには相違なけれども、その代り自分も社會の一員として幾分惠を垂れ恩を施してゐるのであるといふ考が起つて來ると、五分五分であり、お互事であるといふ心が起つて、迚も有難いの、勿體ないのといふやうな感じの起る譯のものでない。理窟ばかりに係つてゐると、他人ばかりではない自分も何々の事をしてゐると、どうしても自分が眞先きにたつて所謂權利義務の觀念しか生じない。人間が權利づく義務づくになつたらもう抑々の末で、其處には權利も義務もあるものでない。

宗教に進まなければ眞の道德ではない

然るに佛敎を信ずると、今迄自分の施した恩にばかり目のついたものが、逆に今後は自分の蒙つた恩にのみ目がついて來て、總ての物から自分は並々ならぬ廣大の恩を受けてゐる、卽ち他からの恩の中に生活してゐるのである、誠に有難い勿體ないと感じられて、今迄の自分の不平や不滿に對して申譯ないと慚愧の念が起つて來るのである。此點が理窟と宗敎の信仰との別目である。理論や理窟で揑ね廻してゐる間は迚も道德が徹底的に行へるものではない。然らば佛敎の信仰によると、何故に自分が主となつて考へられて來ないやうになるのであるかと云へば、信仰を獲た上は、自分の身を如何に眺め、自分の心を如何に吟味しても、自分の身、自分の心に偉い働きありとは思はれないやうになるからである。凡て自分に偉い力ありと自惚れてゐる間といふものは、迚も佛の慈悲が分つたりしやう筈はないのであつて、從つて佛を信ずることも出來ない。何事をしてもたゞ自分が偉い、自分が立派である、自分が淨いと高慢心のみ强まつてゐる間

は宗教などは分らない。自分は他人に對して親切も慈善も出來るものでない、自分は道德的に駄目なものであると衷心から合點せられた時に、始めて佛の慈悲の尊いことが分つて來るのである。

信仰に立てば世界は一變する

斯樣な宗教の信仰を有つて世界の物に對して來ると、何處を向いても自分に目が着かぬやうになり、自分が偉いとか、役に立つとか、人の爲めになれるとか考へやうと思つたつて考へられないやうになる。之れが若し理窟からであれば、自分も社會の一人であつて、幾分なりとも社會に向つて貢獻してゐるに相違ないのであるが、併し宗教の信仰の立場に立つと丸で正反對に、自分のやうな淺猿しい一向人樣の爲めにもなれない者であるに拘はらず、このやうな者をも見捨てずに人樣からは深い恩を施して下さるとは誠に有難い辱けないと考へられて來て、總ての恩を粗末にしないやう、どうかして萬分の一なりとも報謝したいものであるといふ考へが起つて來る。故に道德も、宗教の信仰を土臺にしないと、どうも滿足でないのである。

何故今日は恩を知らないか

然るに御恩報謝とか感恩とかいふ恩を知ることが、近時は非常に衰へて、或は全く此の心懸けが失せて了ふのではあるまいかと思はれる位貧弱になつた。何故今日の日本の社會が斯程迄に報恩の觀念が薄らいだのであるかと云へば、色々の原因もあらうが、先づ西洋流の科學の影響を受けて、何事でも理窟づめにしなければ承知しない風から餘程禍してゐるやうと思ふ。學問のあるものは勿論學問の無いものまで、一から十まで理窟でなければ承知しない。一體科學と云ふものは、研究する所の物を自分以外に置て客觀的にこれは何であらう、どんなものであらうと研究して行く性質のものである。だから何を見ても自分を考へずに、たゞ向ふの物ばかりを考へる。自分と物とを關係さして見ることをしないで、たゞ物ばかりを見るから從つて理窟一天張となる。手近い例を取れば、太陽である。昔の人は太陽をお日樣とか、お天道樣とか云つて大層大切にして尊

んだものである。私の幼少の時分には、世間一般の人は今日幸に無事で暮させて頂くのは偏へにお日様のお蔭であると言つて、朝起きると先づ東を向いて日の出を拜むと云ふ風であつた。又子供の時には必ずお日様の方に向つて小便したりするでないぞと親から度々戒められたものである。所が今日の人は、小學生時代から、これは太陽といふものであつて熱の塊である、だから光るのは當然で、何もお日様と云つて拜むべきでもお天道様と云つて尊ぶべきものでもないと敎へられてゐる。だから有難いとも尊いともそんな考は露程もなく、日光目がけてドシ〳〵小便垂れて一向怪しまない。この調子であるから、親に孝行せよと云つても君に忠義をせよと言つても、先づ第一に親とはどうするものであるか、君とは如何なることを爲さるべきものであるか、その方から聞かなければ承知しない有樣となるのである。

青年の無法なる考

今日の學生の先生に對する考を見れば、何よりも第一に如何に現今の日本に感恩思想が衰へつゝあるかゞ最も明瞭に分らうと思ふ。

先生は月給取

小學校の生徒ではまだ大分無邪氣な可愛いらしいところもあるが、中學生位になると、先生は學校で物を敎へて生活して行く人間、一種の商賣をやつてゐるのである、自分等が月謝を出して生活をさせてやるのだ位に考へてゐる者もあるからして、心から先生を敬する考も起らねば、從つて授かつた學業も粗略に流れて了ふのである。不良少年とか不良學生とか云ふ者は皆恩を感じない人間になつた者である。

親は子を育てるもの

先生ばかりでない、親に對してもその通り、親は子を產んだのであるから、產んだ子の面倒を見たり敎育したりするのは當然であつて、そのため特別の恩なぞあらう筈がないと考へてゐる。斯樣な恩を全く忘れてしまつた考が家庭や學校だけで止まつて居ればまだ幾分安心してもよからうが、それは決して何處迄恩を忘れて何處から恩を感じ出すと云ふ境界

線の定まつたものでない、この考が不知不識の間に國民全體に行渡ると餘程國家といふものも危くなるであらうと思ふ。現に口へこそ出さね、今の教育を受けた人間には漸次不都合千萬の思想が蔓延しつゝあるのである。このやうに、親でも先生でもそれを研究しなければ承知しないやうな人間に向つて、何程忠孝を說いても畢竟燒石に水も同然で何にもならない。昔は主君の馬前で討死をしたと聞かせても、詰らぬことをやつたものじや位にしか感じない。

乃木大將の殉死評

彼の乃木大將が殉死をせられた時にも、聞いて吃驚してその忠誠を賞めたものも勿論澤山あつたが、中には、大將の精神は立派なものである、併し昔風の武士道を守つても仕方がない、現代には現代風の武士道があると賞めてはゐるが、飽迄この精神を押通して行かねばならぬと言つた人は極めて尠ない。賞めたのやら賞めないのやら、感心したのやらしないのやら薩張り譯の分らぬやうな評論を當時の新聞に出した堂々たる學者も少なくなかつた。高いところから國民を指導する責任をもつてゐる人が既に怪しくなつてゐるのだから驚かざるを得ない。

研究的態度には道德無し

是等は皆忠孝を始めとして總ての道德に至る迄、研究的態度で見るから斯樣に不徹底千萬のものとなるのであつて、從つて斯樣な態度からしてはどんなにしても有難いとか勿體ないとかいふ感恩の思が生じたりはしない。假令宗教が必要であると言つたとて、一體佛とは何だ、神とは何者だと考へて來たら、ほんたうの信仰などを獲られやう筈はない。若し眞の信仰が得られないのであるなれば、何程宗教が必要だと云つても所詮益ないことである。先づ吾々は御恩に目が付かんことには駄目である。御恩に目の付くには、親とか先生とか其他の恩人を客觀的に眺める態度卽ち科學的研究態度では駄目であつて、自分を眺めて來んければならぬ。例へば孝行にしても、親とは何者であるか、何を爲すべきものであるかと考へて來たら到底孝行の分り得やう筈はないのであるが、

之れに反して、今日のやうに何處へ出てもさう人の輕蔑を受けない人間となることが出來たのは抑も誰れの力によるかと自分を眺めて來れば、孝行の如何なるものであるかは直ぐ分るのである。何事にも彼此客觀的に批評する研究的態度に立てば、恩といふことが薩張り分らなくなつて仕舞ふ。而して今日は恩が分らぬやうになつたのであるから、日本の結構な道德が反古同樣に棄てゝ顧みられないやうになつたのは寧ろ當然であらう。日本の道德の、とどの詰りの要素といふものは、先祖の御恩を知つて、それを報いやうとするところから發してゐた。故に日本が精神的に榮へるためには、國民が先祖の御恩を强く意識し感謝しなければならんのであつて、從つて知識ある人は一層此の先祖の御恩を自分も有難く思ひ又他にも奬勵しなければならないのであるにも拘はらず、動もすれば事實の之れに反するが如きことあるは國家のため甚だ殘念なことである。斯樣な理由により、折角萬國に類のない立派な道德が發達して來ながらも、漸々國民が恩を何とも思はないやうになつては、日本の道德も衰へざるを得ないのである。恩を知ることは日本の道德の最も大切な要素、否日本道德の基礎であるが、その知恩報德は如何にして養はるゝかと言へば、矢張從來の日本があつたやうに佛敎の信仰を外にしては到底駄目であると固く信じてゐる。佛敎の道德的方面は徹頭徹尾人に恩を知ることを敎ゆるより外にはないのである。

第四章　十方觀と修養

差別と平等とを離してはならぬ

今迄述べて來た通り佛敎に於ては、世界の萬物が實質上よりは同一であり、現はれたる姿形上よりは一として差別ならざるはなしと說く。併し差別と言つても同一の本體より現はれた差別であつて、決して個々獨立に無關係であると云ふのではない。之れを譬ふれば、恰度海面に起伏澎湃する千波萬濤が互に持ちつ持たれつ相關聯して、一の波は他の總ての波に關係し、總ての波が一の波に關係してゐるやうに、世界の萬物は各々差別の形相を執ると雖も、互に持ちつ持たれつして孤立してゐるものとては一もない。斯く萬物は互に關係し合ふことによつて存在するものであるが故に、又吾々人間に於ても、自分一人が現にあるが如き生活をすることに於て、餘他一切の人類の恩惠に浴してゐるの

であつて、この點を充分注意すると同時に、その恩を無にしないやうに、卽ち自分だけよければよいといふ利己心を棄て、相交際して行かねばならぬ。然るに近來は此の恩についての觀念が非常に薄らぎ、或は全く無くなつたのではないかとさへ思はれるやうになつた。從つて實踐道德が等閑に附せられて一向その實が擧がらない。

成功熱

近年成功といふことは大變世間一般に論ぜらるるやうになり、又誰れでも成功を望み求めることが恰も渴したものが水を求むるやうな有樣である。成程失敗を好む者はないので、誰しも成功を欲するに違ひないが、併し世人が成功々々と騷ぐその成功とは一體何を意味するのであるかと考へると、餘り結構な成功とも言はれない。卽ち彼等の言ふ成功とは、大抵物質的意味の成功である。例へば金を澤山儲けて一躍千金の大盡になるとか、高い位置を得るとか、或は世間から賞められるやうな目醒しい仕事をするとか、是等を以て成功であると考へてゐるらしい。勿論是等とても失敗ではなからうが、是を以て

成功の全部であるとは言へない。かゝる物質的成功熱を盛んに煽り立てるものであるからして、青年中には隨分此種の成功を夢みて煩悶するものが多いのである。啻に青年ばかりでない、壯年の者或は老人に至る迄矢張り成功に醉つて了つて、何か一つ天適美事な事業をしなければならないと考へて來るやうになつた。斯樣に何か一つ目醒ましい仕事をせんければならないと、その方の心にばかり勝たれてゐて、つい道に外ぐれたことをしてならないといふ側の心が負けて了ふ。

「勿れ」の上に「爲せ」

一體人間は、一儲けしやうとか、名前を賣らうとか、素羽らしい仕事をしやうとかいふやうに、「爲す」といふ方面ばかりに氣を取られ又之を鼓吹してゐると、從つて「爲す勿れ」といふ方面が粗略になるのは勢ひの然らしむるところであらうと思ふ。道德は斯樣に「爲す」とか「爲せ」とかの一方にばかり傾いて、それで實踐の効果の擧るものではない。「爲す勿れ」の側に確固たる基礎が定まつて、その上に於て「爲す」とか「爲せ」とかいふ方面が出て來たのでなければ一向力がない。從來の東洋の道德は多くこの「爲す勿れ」の消極的方面に先づ力を注いで「爲せ」といふ積極的方面を後にしたのである。佛敎には「諸惡莫作、衆善奉行」と、總て諸々の惡は作すこと莫れ衆の善は奉行せよと、矢張り「爲す勿れ」の側が先きに立つて、然る後に「爲せ」といふ積極的方面を敎へたものである。前にも申した如く、佛敎では戒法が修行に於て重んぜられてゐるのであるが、この戒法も、つまりは「止持、作持」といふことである。

止持と作持

止持とは、生物の生命を取つてはならぬ、人の物を盜んではならぬ、道ならぬ男女關係を結んではならぬ、嘘を言ふてはならぬといふやうな具合に、專ら消極的方面からする修行である。然るに作持とは、生物の命を救へ、善い事をせよと云ふ具合に、積極的方面からの修行である。斯樣に止持と作持との二方面の修行があるが、その何れが先きかと言へば、矢張止持が先きになるのである。「爲す勿れ」の止持が先づ充分出來るやうになつて、其

處に始めて「爲せ」の作持が行ひ得るやうになる。佛敎のみでない、儒敎固より然りで、大體明治以前の日本の道德は皆消極的方面を先づ敎へ、それが出來た上で積極的方面を勤めたものである。然るに近來は、「爲す勿れ」の消極的方面では人間が畏縮するとか何とかの理由で以て、始めから「爲せ」の積極的方面にばかり注意を向けて、之れを重んずるやうになつた。固より「爲す勿れ」の一面にばかりに力を入れては畏縮する傾があらうけれども、さればとて、現今のやうに唯だ無暗に「爲せ」といふ方面にばかり力を入れるとその當然の結果として「爲す勿れ」の側がお留守になつて、頗る危險があるのである。故に道德の修養に於ては、此の何れも粗略には出來ないのであるが、矢張「爲る勿れ」の消極的方面の修養を積んで、然る後に大に「爲す」側を修養する方が自然でもあり又結果も擧るだらうと思ふ。何となれば、仕事を爲るといふ側にばかり目を付けてゐると、これ程の大事業をするのであるからこれ位の惡事は仕方がない、少しばかり不都合のところがあつても寬大にして貰はねばならぬと自己免許をするやうになる。斯樣な處から不知不識の間に、惡い事を平氣で行つて一向怪しまないやうなことになるのである。之れに反して「爲す勿れ」の消極的方面に於て先づ腹が定まれば、それから自然に「爲せ」の積極的方面が出來る。たゞ一方に善い仕事さへすれば、他方に多少の缺點や惡事があつても見逃すべきだとすると、遂には豫期しない惡事が公然と行はれるやうになる。

> 爲すあるの心爲さゞるあるの心

故に昔から「爲すあるの心、爲さざるあるの心」と言つてゐる通りに、「爲す勿れ」と「爲せ」との二つが揃はなければ到底完全な仕事は出來るものではあるまいと思ふ。近頃は餘り「爲せ」の側ばかりを主張するものであるから「爲さゞるあるの心」が失くなつて了ふのである。「爲さざるあるの心」とは、或る事は首が飛んでも命を取られても決してしないといふ心であつて、人間は、どのやうな名譽が得られても、金になつても、都合がよくても、是れだけはすまいといふ心が無ければ駄目である。道理に背き義理に背く事は命を掛

けてもしないといふ確固たる精神、即ち「爲さざるあるの心」が定まつた上で、其の時其の處に應じて善事を爲し事業を企つるのでなければ眞の仕事はやれない。唯「爲すあるの心」のみに傾いてゐると、色々の間違ひや惡事が出て來るのである。道理の分らぬ教育のない人間が惡事をするのなら幾分仕方もないと言へやうが、近來は教育もあり地位も立派な人間が却つて頻繁に惡事をする。惡事の中には幾分同情せんければならないものもあるが、大體よりせば近時の惡事は、教育もなく身分もない人間よりは、寧ろ學問もあり地位もある人間の場合が多いやうである。此の原因が何處にあるかと言へば、今述べた「爲せ、爲せ」の熱に浮かされた中毒が主となつてゐるらしい。良い年をした人間が誤つてゐる位であるから青年が成功熱に浮かされて煩悶するのも一應尤もとも言へやう。將來何か一つ異つた大事業を遣つて見やうなど、柄にもない事ばかりに氣を腐らしてゐるものであるから學校の成績が惡い、すると直ぐ煩悶し出すと云つた風の青年が實に少なくない。假令自分の成績は惡くないにしても、同窓位で出世する者があると、俄かに躍氣となつて煩悶し出す。是等は皆「爲せ」の方を重く見過ぎた餘弊の致すところであらうと思ふ。

昔の親氣質

一體以前であれば、人の親たる者が子に望んだところのものは何かと言へば、出世をして呉れとか、學者になつて呉れとか勿論望んだであらうけれども、それに先立つて最も望んだところの事は、どうか先祖の名を辱しめないやう、親の名を汚さぬやう、道に外ぐれたことをしないやう、義に背かぬやうに一生を送つてくれといふ點であつた。昔の少し見識ある人の書いた物であれば、屹度恁うしたことが書いてある。殊に又何時も懇ろに誡めたことは、大した人間になつて欲しいけれども、假令さうならなくとも、どうか家名だけは汚さぬやう、世間から後指を指されぬやうに一生を送つて欲しいと云ふ要求であつた。

彼の有名な賴山陽の父親賴春水が、自分の親の行狀を書いたもの、中に次のやうなこ

とを言つてゐる。

頼春水の父

或る時春水が親に向つて、「私は永らくの間教育を受けさせて頂いて、今日では大抵の書物も讀めるやうになり、道理も分るやうになりました。併し私は學問をしたゞけで未だ一向世間に知られたといふ譯でもなく、名が揚がつたといふ譯でもなく、この點は誠に申譯がありません。それについて思ふのでありますが、今後如何にしたならば世に顯はれるやうになるでありませうか」と話した。すると春水の親が言はるゝには、「汝は學問をしたことによつて事業でもしやうと思ふのか、又富貴でも求めやうと思ふのか、仕事をして天邇の大功を樹てるとか、富貴を得て贅澤をするとか、そんなことは俺は汝に向つて微塵も望んでゐるのではない、俺が汝に向つて唯だ望んでゐる處は、縱令ひ事情が惡くて一生貧乏で暮しても差支ないから、どうか貧乏に安んじて道を樂しむだけになつて欲しい、そればかりが父の願ひであるぞ」と諭されたと書いてある。遺が偉人頼山陽の祖父だけあつて、子を誡むるにも實に立派な態度であると熟々思ふ。併し獨り春水の父のみに限らない、以前は多少の見識を持つた親であれば、自分の子孫に只物質的成功をのみ望んだりはしなかつた。私共も少年時代に親から受けた教訓は其處であつた。勿論親に優る者になれとか、學者になれとか言はぬこともなかつたけれども、朝夕主として諭したところは、どうか惡事をしないやうに、どうか先祖の名を辱め家名を汚さないやうにといふことであつた。だから今になつても此の教訓だけはどうしても忘れることが出來ない。親を憶ふと同時に直ぐ此の教訓が胸に浮んで來る。父親がさうであつたばかりでなく、女でも少し氣慨のある者は皆矢張子供に對して上に述べたやうな教訓を與へたものである。

賢母子を誡む

今私の記憶してゐるのは、支那の或る女が、南清の方へ官吏となつて赴任してゐた息子にあて、送つた詩に、女ながら中々感心なことを言ふて息子を誡め且つ勵ましてゐる。その詩は

家内平安報レ爾知ニラシム　田園歳入有ニ餘資一
絲毫不用南中物　好作ニ清官一答ニ聖時一

であつたと記憶してゐる。この詩の大意は、家内一同無事息災に暮してゐるから此の事を爾に報ず、どうか安心して呉れ、田園からの收入で我々家内の者の生活には何不自由しないから、決して汝の僅かな給料を送つて呉れるには及ばない。家の方には何の不足もないのだから、どうか汝は清らかな心の正しい官吏となつて、聖天子の御恩澤に報ゆる覺悟を持つて欲しい。それが一番大切であつて、その外家内の者共の身の上なぞについて寸毫も鄙しき心を起すではないぞと諭したのである。

一體女といふものは隨分欲の深いものであつて、呉れる物なら少しでも欲しいと思ふのが常であるが、此の人は女として隨分見識の高い賢母であると感心してゐる。前申す通り、日本に於ても以前は、どうぞ道に背かないやう、どうか先祖の名を汚さないやうにしてくれといふ教訓が、親たる者の子に對する教訓であつた。昔の人間は、恁うい

う教育を受けてゐたのであるから、或は今の人に言はせると昔の人間は大きい仕事は出來なかつたかも知れないが、兎に角、正直な人間、惡事をしない人間が今よりも多いやうであつた。

今の親氣質

然るに近頃は之れと反對と申しては少し言ひ過ぎかも知れないが、兎に角反對が近いやうである。何となれば今は大抵の老人に至る迄成功熱に染み込んでゐて、我子に向つても、どうか出世をさせたい、普通人以上の境遇に在らせたいといふ希望が眞先きに立つてゐて、どうも昔の人のやうに、假令傑物にならなくても惡事だけはしてくれるな、眞人間になつて欲しいといふやうな希望や教訓にかけては甚だ缺けてゐるやうに考へられる。今日高等の學校へ無暗に澤山入學する現象は或は之れを證明してゐるのではあるまいか。今日東京邊では髪結や人力挽の娘まで高等女學校へ入れてゐる、女ばかりでない、中學校へ入學する者の數も實に夥多しい。その身元を調べると、食ふや食はずといつ

た風の苦しい家計でありながら、強いて無理算段してまでも高い程度の學校へ出さうとしてゐる。勿論一般の人が充分教育を受けることが何も惡いと申すのではないが、斯樣な苦心をしてまでも強いて學校へ入れやうとする父兄の心の中には、唯だ學問が大切であるからといふよりも、寧ろ前に述べた出世をさせやう、えらいものにしやう、澤山金の取れる人間にして當人は勿論の事、一家の者迄が安樂な生活をしたいといふやうな希望が中心となつてゐるらしいやうに思へる。

學問は金儲けのためでない

恁うした希望を掛けて其の子女は學校へ送らるゝものであるから、愈々學校を卒業して而も親や兄弟の希望に副はれないやうな世間の事情に遭遇すると、所謂生活難となつて本人自身は非常な煩悶を起して來る。だから學問をするにしても又させるにしても、甚だ面白からぬ事が動機となつてゐて、學問する人間は、たゞ一途に出世したい、金を儲けたい、名を顯はしたいと、そればかりか常に頭を支配してゐるものであるから、當初の希望が外れるやうなことになれば、勢ひ失望し悲觀し、果ては自暴自棄となつて切角の教育も水の泡、却つて身を持崩す本となる。從つて自分の本分を守つて、如何なる境遇にも其處に安心して、所謂椽の下の力持ちで不平を言はずにゐるといふやうな美しい心得がすつかり無くなつたのである。餘り何事かを「爲す」方面ばかりを皷吹し過ぎるとその結果は斯樣になつて、國民の健全なる性質を失はせることになるだらうと思ふ。併し乍ら又昔のやうに「爲す勿れ」の側ばかりでも世の進歩に伴ふことが出來ぬから、其の中間を取つて行くことが大切であらうと思ふ。勿論この中間を取るのは中々難かしいことであるけれども、上に立つて教へ導く人も、下に居て教を受ける人も、共に此邊の所は十分の注意を拂はなければならぬ。

日本道德と佛教

斯樣な具合に、今日の世間の人が一面物質的成功熱に浮され、他面それと聯關して報恩の心掛を薩張り無くしてしまつた結果、今日の道德の衰退に餘程影響したことであらうと考へる。之れ

も以前とは恰度正反對であるのではなからうか。以前であれば、報恩が非常に大切の事として重んぜられてゐた。そこで皆の者が恩を強く感じて、それを報謝したいものであるといふ考が非常に強かつた。かくあつたればこそ日本の道德が今日までも傳はつて來た譯であらう。日本道德の基礎は報本反始の精神であるが、其處へ佛敎なり儒敎なりの精神が補けたから益々日本の道德が發達したのである。從來の日本人に佛敎が深い感化を與へたのは、此の報恩といふ側の感化であつた。昔の書物を讀んで見れば、佛敎を排斥する人でも、如何に佛敎の報恩思想が國民に甚大の感化を及ぼしてゐたかゞ直ぐ分り、決してそれを見遁すことは出來まいと思ふ。佛敎の經文には何れも報恩を說かざるものとてはないのであるが、殊に心地觀經の報恩品は儒敎の學者に迄非常に感化を與へて、彼等の書物にも到處に引用されたり、その思想を暗に取容れて敷演してゐるものも多い。この點のみを見ても、如何に佛敎が日本道德に大きい力を與へて來たかといふことが分るのである。

然らば其の心地觀經の報恩品には一體何が說いてあるかと云へは、所謂四恩について丁寧周到に敎へてあるのである。

四恩

四恩とは、一に父母の恩、二に國王の恩、三に一切衆生の恩、四に三寶の恩卽ち如來の恩である。父母の恩、國王の恩とは、申すまでもなく親に對し天子樣に對してその恩を感謝することであり、一切衆生の恩とは、總ての人から受けた恩であつて、卽ち此の中には朋友の恩や師の恩も入つてゐるであらう、是等總てを一切衆生の恩に籠めて了つたのである。併し師の恩、兄弟の恩、朋友の恩ばかりでない、總ての物から皆恩を受けてゐる。この事に關しては經文中精しく說いてあるのであるが、今は後に讓ることゝする。父母の恩、國王の恩、一切衆生の恩を說くにも、佛敎は佛敎の說き方があつて、儒敎などに說いて無いことがもう一つ深く說いてあるから、其の方の側に於て日本の道德に餘程强い力を與へたものである。卽ち此の四種の恩を說くに當つて、儒敎などに於

ては唯だ一世の上だけで說いてゐるから、恩を感ずると云ふても根柢から力が湧いてきにくい憾がある。所が佛敎では單に一世に止まらず三世に亘つて說いてゐるのであるから、恩と云つても、それが非常に深味と力とを增して來る。若したゞ一世のみのことであるなれば、今日の人の言ふやうな理窟ばかり際限もなく次から次へと出て來て、遂に親に孝行と云つても分らなくなり、よし多少分つたやうでも一向力あるものとして實行出來ないやうになる。動物でも子を產めば世話をする、況んや萬物の靈長たる人間の親たる者に於てをやなどゝいふ論法となつて、自分が厄介をかけたり世話を受けたりするのは當然であると理窟を持ち出せば、もう孝行も何もあつたものでない。君に對しても亦この論法から行けば、勢ひ疑問を起さゞるを得ないやうになる。そして若し忠孝に疑問を起すやうになれば、本當の忠孝が行はれないやうになるのは極めて明らかな道理である。

然るに佛敎の說方は一世限りでなくて三世に亘つて深く說いてゐる。卽ち我々が此の

佛敎より觀たる忠孝

世界へ生れて來たのは、生れて來なければならない原因を自分で作つた爲めであるが、併し生れる結果には父母の力を借つたのであるから、其の親に對して、どうしても感謝しなければならない。世間の理窟から言つたならば、親が生んだのであるから親の世話は當然であるのかも知れないけれども、佛敎の觀方よりすれば、親の任意によつて生れたのでなく、生るべき業を自分が旣に作つて置いたのが、偶々親の力を借つて初めて自分が生れ出づることが出來たのであり、學問も出來敎育も受けられたのであるから、其の恩は非常に深く感ぜられてくる。親の恩ばかりではない、總てがその通り、今世一世のみならず、前生前々生に掛けて考へると、夫婦の如きも淺からざる因緣を感ずるところによつた結合である。前生にあつても前々生にあつても、一生も二生も因緣が段段重なつて初めて今生に夫婦の緣が結ばれたのであると考へてくれば、夫婦の關係も至極厚い尊いものと感ぜられて來べきである。兄弟もその通り、今生に於て兄弟の契

を結ぶのは二世も三世も重なり重なり合ふた因縁に依つて兄弟となつたのであると感ずれば、兄弟の仲も睦まじくせざるを得ない。人間は妙なもので、關係が深くなれば深くなる程情に於て離れ難くなるけれども、若し關係が薄いと、さうはならぬ。今日でも忠僕義婢と言はるべき人が絶えたのでなく、人情が一般に薄らいだ時代でも中々感心な人もないではない。自分の身を棄てゝ主家を守るとか、自分の奉公して貰つた金を以て、家運の頽いた舊主の子供を養育する人さへもある。

我家の下女

今は亡くなつたが、もと私の家に六十年間程勤めてくれた下女が居た。これ程の深い關係になると、下女であらうが僕であらうが、一家の中で一番家風や古事に通じてゐるやうな譯であるから、假令多少の氣に入らぬことや面白くないことがあつたとて迚も投り出してしまふなどゝいふ考の起つたりするものではない。又下女にした所で、多少の嫌な思位で出て行かふなどゝ考へたり出來るものでない。斯樣な深い關係になると、主人と召使と相方に情が濃やかになり、所謂切つても切れぬ縁の絲で結ばれるのである。之れに反して、若しも一ケ月か二ケ月かで主家を轉々して歩く下女になると、關係が淺いから從つてその情も亦密になることが出來なくて、出て行く方も出す方も一向平氣にしか考へない。斯樣に關係が深くなればなる程、情に於て離るべからざるものとなる。そこで親子兄弟夫婦の間柄に於ても、佛教で說くやうな工合に關係を深く考へ、唯今世限りの關係でなく、前生前々生と、二世も三世もの關係が重なり重つて今生の關係を結んだのであると考へて來ると、どうしても氣に入らぬとか、好まないとか、都合が惡いとかの理由で以て、背いたり離れたり迚も出來る譯のものでない。こうなれば、まさかの場合には君のために死し、親の爲めに死し、良人の爲めに生命を棄つるも辭しないといふ覺悟が生じて來るのである。

武士道の根柢

我が日本の武士道といふものは正しく此處に其の根柢を下してゐるものである。卽ち假令此の現在の世の生命は棄てゝも來

生に於て又同一の深い關係を結び得るのである、今生限りの關係でなく、前生、前々生よりの關係であると信ずる所に、煌々たる武士道の精神が煥發するのである。之れに反して若しも死んだら火の消えるやうに消えて了つて未來なく、君臣、父子、夫婦と云つても唯だ今生限りの偶然なる關係に過ぎないと考へたならば、決して徹底した忠孝や夫婦の和合や、其他の道德が行へるものでない、他人のために自ら喜び勇んで死ぬことの出來たりするものではない。若しも佛敎の信念を根柢に有つてゐれば、恩あるものゝためには、何時なりとも死して少しも悔いず、又怨みとしない强い精神が現はれ出ずば止まないのである。

武士道の精神と佛敎の信念

德川時代になると儒敎の勢力が强くなつたものであるから、儒者などに言はせると、我國の秀れた道德卽ち武士道は佛敎と些の關係もないものであるかの如く言ふが、之れは如何にするも儒者の僻見であつて正しく歷史を理解したものとは云へない。武士道は決して德川時代の占有物でなく、ズット以前より此の武士道が立派に行はれてゐたのであるが、その武士道の精神は全く佛敎の報恩思想に基いてゐるのである。例へば武士的精神の立派であつたことは、鎌倉時代の如き遙か德川時代に優つてゐても劣つてゐない。その鎌倉時代の强い武士的精神は何によつて養はれたのであるかと云へば實に之れ佛敎の感化であつた、一々例を擧げないが、若しこれについて疑問を懷く人あらば、試みに同時代の歷史を繙いて精密に且つ冷靜に調べて見れば直ぐ分る話である。であるから今日に於ても眞に忠孝道德を實行せしめんとならば、どうしても佛敎に言ふ三世にかけて深く說いてくるのでなければ、誰れにも心から納得させ理解させる譯には行くまいと思ふ。唯だ倫理や道德の理論で押し詰めて行けば、どんなとでも夫れで以て出來るものゝやうに思ふ人もあるやうであるが、それで果して論者の言ふやうな理窟通りの實行力が生ずるものであるだらうか、此の邊の所は餘程愼重に考へなくてはなるまい。唯だ漫然たる理窟ばかりを押し通して人情を考へないやうな理論が、人生の實際

に於て何の力を持つであらうか。理窟一點張で、如何なる譯で自分が此處に在るかといふことの合點が行かぬと、親があるから自分があり、親が無ければ自分は無い、親が產んで初めて自分が在るものであるから、親が育てるのは當り前でないかと考へたいやうになつて來る。所が佛敎であれば、前に述べたやうに報恩について深い處から說き起して來るのであるから、從つて日本道德の根本精神たる「報恩反始」の念がそれによつて初めて徹底されるのである。總ての物に對して皆幾生にかけての關係ありと考へて行けば、人情も極めて細やかに優しくならざるを得ない、三世の因緣から考へて來れば、譬へば鳥の聲を聞いても、或は前生に於て兄弟であつたのかも知れぬ、朋友であつたのかも分らぬ、或は夫婦の契を結んでゐたかも知れないと考へて來るからして、假令ひ無心の小鳥一羽であつても決してそれを無情に冷酷に取扱はれないやうになるであるまいか。斯樣な考があつてこそ、其處に始めて人間の美はしさが生ずるのである。

行基菩薩の歌

世に行基菩薩の歌として傳へられてゐるところの

ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふと

いふ歌は、實に此の人情の優しさ美はしさを示したものとして大變有難い何とも云へぬ懷かしさ親しさを感じさせる歌である、この歌のやうな感じがあれば、鳥の聲を聞いても、〆太一つ射つてやらうと鐵砲擔いで出掛ける氣には迚もなれるものでない。若しこの感じが微盡もなく、生物の命を取るのを何とも思はないやうな殘忍の心を有つてゐる人間であれば、左樣な人間は、何かの機會で人間を殺すのも何とも思はないやうにさへ遂にはなるであらう。無暗に遊獵を好む人間は境遇の如何によつて殺人をも平氣でやれる人間である、して見ると我々は殺人犯を現に犯した者ばかりを惡む譯には行かない。道德の根本は冷やかな理窟でなく、人間のやさしい溫かい情に基いて初めて實行出來るのである。そのやさしい溫かい情とは、御恩を泌々と有難いと思ふ情である。而してこの情は佛敎の信仰によつて養はれるのであ

る。かく申せば、それは都合はよいけれども、併し前生があるとか未來があるとか云ふことは分らないではないかと言ふ人があるかも知れないが、佛教に於ては何事についてもよい加減に作つたものは一つもない。前生とか未來とか佛教に於て言ふのは、それについて確固たる哲學的理論を有つてゐるのである。よい加減に想像したのでなく確固たる哲學的根據に基いてゐるのが佛教の信仰であるが故に、佛教の信仰は決して迷信でない。若し此の根據が無かつたとすれば、佛の境界に入るとか救濟さるゝとか云つたところで、少しも分らないことになつて了ふ。佛教に於ては一方に確固たる理論を有つて、その土臺から信仰の方面が現はれて來るのであるから最も完全なる宗教と言へるのである。

佛教の信仰には哲學的理論を背景とす

近頃、世間では宗教の信仰が必要であるといふことを餘程氣付いて來たけれども、今申した佛教のやうに確固たる理論の上に信仰を有つ點を多くの人は看過してゐるから、喧しく言ふ割合に信仰は實は甚だ怪しいのである。苦しい時とか病氣に罹つた時とかには無暗に有難いと言ふけれども、その代り病氣が治り苦しいことが無くなりでもすると、有難さも何處へやら消え去つて了ふ。さういふ信仰であるなれば一向根柢の無い信仰と言はんければならぬ。そこで佛教の如く理論の上に土臺を固く置いて、それから生ずる信仰でなければ信仰の基礎が立たない。哲學上の根據を有つた正しい佛教の信仰が基礎となれば、始めて恩を感ずることが出來る。そして恩を感じて來れば世間の道德は獨りで盛んになつて來る。故に世間の道德であつても、それが佛教的信仰を基礎として起らなければ、道德の實行は中々覺束なからうと思ふ。この點で以て教育と宗教とが密接の關係を有つて進まなければならぬことが明かである。教育上如何なる理窟を以て道德を說かうが修身を講じやうが、唯だ單なる理窟だけでは、人間の心の底を和らげ道德を實行せしむることは餘程困難であらうと思ふ。

今日の教育に於ては、以前よりは大分よくなつたやうであるが、それでもまだ宗教を

學校教育で家庭の信仰を破壞してはならぬ

無視してゐるところがある、それでは果して教育の効果が期待してゐる程擧がるだらうか餘程疑はしい。然らば學校に於て宗教をドシ〳〵說いたら宜いかといふと、そんな無法のことは出來ない。たゞ學校に於ては教育家たる者が、從來のやうに兒童に向つて宗教を輕蔑すべきものと思はせるやうな印象を與へないで、勉めて家庭の宗教の大事であり大切であることを考へさせるやうにすればよい。從來のやうに、家庭にある信仰までも打碎いて了ふやうな淺薄の理窟ばかりを學校で教へた所が、中々效果のあらう筈は無い。家庭に傳はつてゐる信仰は碎かないで、可成それを間接に育てるやうに學校で教育して貰つたらば、家庭の信仰と學校の教育と相俟つて道德の實踐に餘程力を生ずるに違ひない。

子孫への贈物

營に學校のみならず家庭に於にも、先祖から奉じて來た宗教の信仰を子女に向つて、大切であり尊重すべきものであるといふ觀念を懷かせるやうにして行かなければならぬ。これこそ親たるべき者が子孫に對しての唯一の尊い賜物であり贈物であらう。如何に子のため孫のためと一生汗水垂して金を貯へ田地を買つて遺した所が、その子孫の心が狂へば一朝にして金錢も田地田畑も煙のやうに無くなつて了ふ。故に金を遺すなればその金に宗教の信仰を添へて遺し、田地を遺すなればその田畑に必ず宗教の信仰をも添へて置くことが、親として最も大切な務めであらうと思ふ。此點に注意を向けてゐない不用意の親であれば、世間の實例によくある通りその家は必ず永續きはしない。宗教の信仰の全く缺けてゐるといふやうな家は決して永續きするものでない。之れは論より證據、世間の實際の有樣について見れば直ぐ分ることである。之れに反して、あの家の爺さん婆さんや兩親は誠に心懸けよく佛を大切にし祖先を敬ひ、お寺へもよく參詣したと言はれるやうな人の家は必ず永續きするものである、そんな例は亦世間に澤山ある。それについて私の實地に見聞した一二の例を話さう。

不用意の遺産

九州の或る金滿家に起つた事件である。その家の當主の弟がフトしたことから精神病に罹つた。そのため當主たる兄がその弟を東京の精神病院へ入院せしむるために連れて來た時私の友人に話したことを私は友人から又聞きした話である。能く々々弟の精神病について迷惑したものと見えて、言ふやうには「私の親は金も充分遺して置いてくれ、田地も澤山遺して置いてくれましたから、その點から申せば誠に世間の親以上に私共は大恩を受けてゐるのでありますが、併し乍ら私の親は私共に遺す物がもう一つあつたのに、それを忘れてくれましたばつかりに斯う云ふ憂目を見なければなりませぬ」と言ふたさうである。これはどう云ふ意味かと申すに、若しも我家に宗教の信仰があつて家内中の者が精神上に安心が出來てゐたならば、弟はこんな精神病にも罹らず自分もこんな辛い思ひはせなんだであらうに、宗教の信仰を以て家内の者の精神を休あ頭を鎭めることを忘れて了つて、金や田地にばかり目を着けてゐたものであるから、こんなことが起つて來た。何故親が宗教の信仰を平素自分等に勸めて置いて呉れなんだのであらうと云ふ親に對する不平であつた。

用意ある遺産

此の例と反對に、親が信仰を勸めて置いて呉れたのを非常に有難く思ひ、親が澤山金を遺して呉れたと同時に、若し宗教の信仰を仰を與へて呉れなんだならば、困難苦勞の結晶たる資産も煙と消えて了つたであらうにと悅び、親に對して無限の感謝の念を懷いてゐる人も世間には決して尠なく無い。これについて私は次のやうな懺悔話を本人から直接聞いたことがある。

先年某所のお寺で三日ばかり講話をしたことがある。その最終日に該寺の住職が言ふには、「今日は最終の日でありますが、それについてこの村の小學校の校長と村長との二人を呼びますから、どうか何か信仰上のお話を聞かせてやつて頂きたい」とて、直樣校長と村長とを迎ひにやつた。校長は止を得ない用事があるからとて代理として主

席教員を寄越した、そのうちに村長もやつて來て、私共一同が別室に入ると、そこで住職が進み出て改めて村長と教師とに向つて云ふには「平素あなた方は何吳となく宗教の世話もして下さることであつて、それがため村も學校も誠に圓滿に治まり、之れはあなた方に對して幾重にも御禮を申上げます、併し私の目から見まする時は、あなた方が佛教をお世話をして下さるのは、謂はゞ利用主義とでも申すものではないでせうか、村を治めるための道具になるやう、學校を管理する上の道具になるやうにと考へて佛教の世話をして下さるやうである、それでは折角佛教の世話をして下さりながら御自身のためには何にもならないかと思つて大變殘念であります。幸ひ今回は先生も來て下さつたことであるから何か御自身の信念上について御不審の簾もあらばどうぞ御遠慮なく御質問下さい。それについても御願ひしたいのですが、どうか將來は御自身に信仰を獲られて、その信仰の立場から何かと宗教のお世話を願ひたい次第であります」

と述べた。私は田舍に稀らしい見識ある僧侶かなと感じつゝ、住職の趣意に從つて一場の話をしてゐると、その中に學校の教師は屢りに涙を流して、何か感激に堪へぬもののやうであつた。私は不思議の男もあるもの哉、何も別に悲しい話も情けない話もしてゐるのでもないのに何故泣くのであらうかと不審に堪へなかつた。所が稍々暫らくすると、其の教員は漸々顏を上げ容を正して言ふやうには、

教師の懺悔

今日あなた方のお話について私の非常に感じたといふものは深い譯のあることです、どうか一應お聞き下さい。私の父と申すは他家から養子として參つたものであります。その父は佛教の信仰の篤い家に人となつたものでありますから大變熱心な信者でありました。所が養子に參りますと、養家は實家とは打つて變つて無佛法無信仰の家でありました。そのため養父母は隨分と私の父に辛く當つたものであります、この養父母は村でも評判になつてゐた位始めは邪見な人でありました。そこで私の父は何とか

して夫等の人を信仰に入れやうと朝から晩まで信仰のお話をして居りました。私は子供の時からそれをよく聞いてゐたのでありましたが、父は家で何か悶着が起ると直ぐそれを機會として信仰の話をしました。後にはそればかりではない、私の祖父母即ち父の養父母が野山に仕事に出ても、必ず私の父はその後から付いて行つて信仰のお話をした程に熱心でありました。そのため頑固であつた祖父も到頭屈して遂に祖父祖母共に信仰に入つて、死ぬ時などには非常に佛の慈悲を喜んで死にました。私の父はこれ程の信者でありましたから、啻に親に信仰を勸めたばかりではありません、母は勿論のこと私共子供に至る迄隨分と幼い頃から毎日々々信仰の話や佛樣の尊いことを聞かされました。のみならず父を大事と思ふたら何よりの孝行であるから佛樣の御恩を忘れないでゐてくれと手を合せて賴むやうに云ひ聞かせてくれました。私は親の熱心に動かされたものでもありますか、だん〳〵信仰も固くなつて後には非常に貴くも有難くも思ひ誠に愉快に思ふてゐたのであります。小學校へ出るやうになりましても、お寺にお勤めが始つてゐるとか說教が始まてゐるとか云ふ時には、其の儘その前を素通りをしたことはなく、必ず本堂へ參詣をして行つたものであります。然るに師範學校へ入つてから種々科學的說明を聞かされるやうになりましたら、昔有難く感じたことが何だかお笑しいやうに感じ、妙な感じが起つて、强ち信仰を全部失つたのではないのですが、どうも以前のやうな具合には參らぬことになりました。何だかをかしい變な疑問や愚痴が出て來て以前のやうな喜びもなく愉快な感じもないやうになりました。是れは何とかせんければならないと思ひながらも今日まで過ぎたことでありますが、今あなた方のお話を承はつて、亡くなつた親のことを思ふて感に堪へません。亡くなつた親があれ程誠心籠めて信仰を勸め植付けてくれたにも拘はらず、未だ眞實の信仰が獲られないとは父に對して實に濟まない譯であると感じました所から、思はず知らず落涙の無調法を致しまして何とも

申譯がありません、どうが幾重にも御許しを願ひたい。

と細々懺悔話をした。斯樣に親から信仰を勸められると云ふことは非常に有難く思はなければならぬことであらうと思ふ。

財産と共に必ず宗教の信仰を遺せ

兎に角財産は何程あらうと、田地は幾らあらうと、それを子に遺し孫に遺す時には餘程注意せなければならぬ。遺すべき有形の金とか田地とかに、今一つ無形の宗教の信仰を添へて遺さぬことには、折角子のためを思ひ、孫の爲めを思ひ、汗水垂らして作つた財産も、遂には一文無しに使つて了はぬとも限らぬから、この邊のところは親たるべき人の充分に注意しなくてはならぬことであらうと思ふ。之を要するに、宗教の信仰といふ力を以て始終心に溫みを加へ心を和げて行くのが、人生に於て一番大切のことであらうと思ふのである。

後篇　三世觀

第五章　三世觀概說

三世觀とは何か

十方觀については佛教哲學から述べれば色々申すべきことがまだ澤山あるのではあるが、修養を目的として說くので佛教の理論を說く考へでないのだから甚だ不完全ではあるが先づこれ位にして、次に三世觀の方に移つて述べて見やう。

三世といふ文字は餘り世間では用ゐないけれども、佛教では始終用ひられる言語であつて、過去、現在、未來の三世といふ意味である。世間に於て全く用ゐないと限つた

次第でもないが、主として佛教に於て使用する言語である。此の三世に關して我々人間の心得方を話したいのであるが、今便宜上平たく申せば、自分の身體の出來なかつた前はどんなものであつたか。前生といふやうなものが眞にあつたかどうか。前生があつたとすれば、それはどんなものであつたか、前生に於て吾人は其周圍の事物と如何なる關係を持つて居たか。

此の身體が無くなつた後はどんなものであるか、死後若し今日のやうな狀態が續くとすれば、總ての物との關係はどんなものであらうか、斯樣なことに關しての大體の心得方を話したい心算である。生れぬ前とか、死んだ後とか、そんなことはどうでもよいじやないか、現在さへよければそれで結構でないかと言ふ人が世の中には中々少なくないが、併しそれ程淺薄な樂天觀に人間全體が若し安心出來るのであれば宗教なぞの必要は無からうけれども、實際却々そんな安ぽい樂天觀に安心出來るものでない。よしんば自分の身體は無いにした所が、自分の生れ出ない前に親はあるのであるから、その親と自分と全く無關係であるとは言へまい。否無關係所か、切つても切れぬ至極密接な關係を繫いでゐるのであつて、此點から行つても前生とか後生とか云ふことを考へずして濟むものではない。のみならず、之れを考ふると考へざるとでは、我々の道德上に影響するところが餘程相違しやうと思ふ。道德のみならず、處世上に於ても影響するところに相違あるは拒み得ない。して見れば、考へたつて考へなくつたつて差支ないと捨てゝ置ける筋のものではない。自分の生れない以前に親はあり、その親は世間と如何なる關係を保つてゐたか、親は世間から如何なる恩惠を受け、世間に對して如何なる務を盡したか、又自分の親とか先祖とかは日本の國家に對して如何なる關係を有つてゐたか、或は日本の他の人々と如何なる關係であつたか。又商賣をするにしても、他人と自分の親なり家なりとの關係を丸で眼中に置かないで商賣の出來やう筈が無い。又未來についてもその通りであつて、自分の身體が未來に於て再び現はれ、今日のやうな狀態が續くものであれば格別のことであるが、縱令ひ此の

狀態が續かないとした所で、矢張死後どんな風になるのであるかと考へずには居られない。自分の死後子あり孫あり、而してその子たる者は他の人々と如何なる關係を生ずるのであるか、孫たる者は社會の人とどういふ關係を持つて行くものであらうかと考へずに居られない。それについて佛敎の方ではどう心得て行くべきものであると敎へるか、その邊のことについて述べるのが三世觀と云ふものである。

二種の三世觀

私は三世を、眞直の三世、斜の三世と二種類に分つて述べたい、この眞直の三世を或は縱の三世と名付け、斜の三世を横の三世と言つても差支ない、否却つて此の方が便利であるかも知れない。今分り易いために圖で以て示せば、

（横の三世）
祖先……祖父母

（縱の三世）
……前々身、前身、現身、後身、後々身……
父母、
子……孫……末裔

儒敎の三世觀と佛敎の三世觀

この中の横の三世は儒敎にもその意味は說てゐるが、縱の三世は殆んど說かない、佛敎は此の兩三世とも說くけれども主として縱の三世を說くのが其の特色である。然らば儒敎に於ては縱の三世は絕對に說かないかといふと全然さうは云へない。卽ち自分の生れぬ前の過去とか自分の死んだ後の未來とかいふものについては、後世の學者になつて來ると全く無いと斷言した人もあるが、元來はさう明瞭に否定してはゐなかつた。儒敎が漸次發達して、支那に於ては宋の時代あたりへ來ると、卽ち有名な朱子とか程子とかいふ

學者が出るやうになつて來ると、儒教は理窟一片に傾いて實踐の方面が餘程閑却されるやうになつた。從つて過去の身體とか未來の身體とかいふものは認めないやうになつたのであるが、それ以前の儒教では、唯だ說かなかつたばかりで、さう瞭つきりと過去や未來が無いと否定はしてゐなかつた。

孔子の三世思想

孔子の如きも「生を知らず焉んぞ死を知らんや」と云つて「私は知らない」とこそ言はれたけれども「無い」と斷言せられた譯でない。又易の中の「游魂變をなす」と云ふ語から考へて見ても、どうも魂が肉體の死と共に烟のやうに消えて了ふものだと考へてゐられたらしくも思へぬ。孔子も矢張り表面から言はれなかつたゞけで、過去、未來について少なくとも、あるのでないか、あるのであらう位には考へてゐられたやうである。けれども「游魂變を爲す」といふ易の語は昔から色々の說があつて、學者の考方如何によつては、どうでも解釋がつく語であるから、唯だ單に此の語一つを證據にして斷定を下すのは早計であらうけれども、禮記の檀弓篇を見ると、其處に明らかに孔子も未來を認められたと言つても差支無いやうに思はれる節がある。檀弓篇に、かういふことが書いてある。李子といふ人があつて、その長男が死んだ。すると或時李子は自分の長男の墓に詣で、その墓の周圍を三回も巡つて「此の肉體は土になつて了ふであらうけれども、魂は則ち之かざるなし之かざるなし」と繰返へして言つたとある。すると此の事を聞かれた孔子は「禮にかなへり」と云つて大層御賞讃なされたと書いてある。この點から考へると孔子は人が死んだら煙の消え去るやうに無に歸してしまふものであると考へられてゐたものとはどうしても思へない。

孔子時代の三世思想

次に孔子の御出生なされた時代の支那の一般の思想がどうであつたかと檢べて見ても、どうも一般の人が、假令佛教程に確實でないとしても、人の死後の未來も生前の過去も認めてゐたらしく思はれるやうなところがある。孔子より少し後れて出た莊子も固より公然とは言

はなかつたけれども、何か過去、未來があるやうな風に說いてゐる。その著たる「莊子」といふ書の中に未來に關す寓言が書いてあるが、全く自分の頭にないことならば、それが寓言にしろ寢言にしろ出さうな筈はない、寓言として出してゐる以上は、矢張り莊子その人の頭の中にあつたものと言はねばならぬ。

骸骨の物語

其の寓言の中に骸骨が物語りをしたことを書いてゐる。或る人の質問に對して骸骨が「吾れ安んぞ能く南面王の樂を棄て復た人間の勞を爲さんや」と答へたさうである。これから考へると、何か死んだ後に一つの境涯があるらしい位には莊子も思つてゐたらしい。

死は歸なり

又莊子より少し後の列子といふ人も、明らかに有るとは云つてゐないけれども、その書物の中に「死は歸なり」と云つて、我々の死ぬのは恰度我々の故郷へ歸るやうなものであると說いてゐる。して見ると矢張列子も後生を認めてゐたのでは無からうか。

故郷に歸る樂しみ

吾々が故郷へ歸る樂しみは又格別である。親元を離れて東京邊へ遊學してゐる學生達が一年に一度の暑中休暇位に久し振で故郷へ歸る時の心持は又一種格別の趣があるであらう。故郷へ歸る樂しみは芝居見物の樂しみとも違ひ、遠足旅行の樂しみとも違ひ、實に言ふに言はれぬ一種の愉快を感ずるであらう。夫れも親でも亡くなつてゐれば樂しみも無いやうであるけれども、親の健全でゐる間に歸つて行くのは實に樂しみなものであるに相違ない。故郷に待つてゐる親の顏を久し振で見て、自分が別れてゐた間難儀した事や又面白く感じたことを話すその味はひと云ふものは何と譬へて見やうもない。親に於てもそれを聞く程樂しみはなく、子に於ても亦それを語る程樂しみはない。そこで此の人生に於て親の亡くなつた程樂しみのない張合のない寂しい一種氣の拔けたやうな感じのするものはない。親の達者である中は何とも思はないかも知らないが、扨て親が亡くなつて見ると、家へ偶々歸つて行つても何だか拍子拔けして張合が無い、自分が

どれ程艱難辛苦して學業を卒へ事業を成就しても、それを心から本氣になつて悅んで呉れるものはない。勿論兄弟姉妹も悅んで呉れるだらう、伯母も伯父も悅んで呉れやうけれども、親の悅んで呉れやうは又格別である。自分が折角仕事を仕上げても或は出世をしても、それを心から悅んで呉れる者がないとなれば、これ程心寂しう泣きたいやうな心細い感じのするものはあるまい。子があつてそれが悅んで呉れると言ふかも知れないが、親の悅方に比ぶれば比較にならない。

心から喜んでくれる者は天地間親あるのみ

故に心の奥底から悅んで呉れる者は天地廣しと雖も獨り親あるのみだ。その親の悅びに久振で接する樂しみは全く他の如何なる樂しみにも比ぶべきでなく、一種格別であるのは無理からぬことである。此の樂しみは親の存する間に限るのであるから、親の無事である間は出來るだけ大切にして、その悅びに接するやうにして行かねばなるまいと思ふ。親が亡くなれば、謂はゞ人生の樂しみは半分殺がれて了つたも同樣である。是れは親を亡くして見なければ分らぬことであらうが、親のある人々は出來るだけ大切にしなければならぬ。私自身の經驗から駄足であるかも知れないが、この事だけは心からお勸めして置く。金が何程有らうが田地がどれ程有らうが、親の悅びに接する程の愉快は人生又と無い。

人生至上の寶は親也

さればこそ古人も「人生至上の寶は親なり」と言つたのであつて、親程結構な有難いものはない。今列子が死を以て故鄉に歸ることに喩へたのは、其處に何か親のやうな親しい者が待つてゐると列子その人が考へてゐたやうに思はれて、床しい感じがする。

孔子以前の三世思想

扨て孔子時代は以上のやうであるが、孔子以前の支那のズツト古い所はどうであつたかと言ふと、矢張り死後消えて了ふとは考へてゐなかつたやうである。例へば支那の大聖人の一人たる彼の禹である。此の禹が或時船に乘つて河を渡らうとした時に、大蛇が現はれて船

中の人々を食はうとした。船中の他の人々は皆眞蒼になつて震えてゐたが、禹獨りは泰然と構へて「生は寄なり死は歸なり」と言つたと傳へられてゐる。卽ち生きてゐるのは恰も旅館に泊つてゐるやうなものであり、死んで行くのは故鄕へ歸るやうなものであると云ふ意味の語であるが、して見れば聖人禹も全く人間の魂が空に歸し無に歸し煙と消え去るものとは考へてゐなかつたのである。

聖賢君子は悉く未來を信ぜざるなし

昔に禹ばかりでない、一體昔から聖賢君子と謂はれるやうな人で、假令ひ表向には、過去がどうであるとか死後がどうであるとか言はなかつたにしても、尠なくとも死んだら火の消えるやうに又煙の散るやうになつて了ふといふやうな心細い寂しい考を懷いてゐる人は一人も無かつたのである。此の點が現今の日本の偉い人など、は餘程相違してゐるところであらうと思ふ。

然るに近來になると之れとは反對に、肉體の死と共に人間は全く消えて無くなつてしまふと思ふのが餘程氣の利いた偉い考であるかのやうに思ふて、それを大邊得意がつて喜んでゐる人々が多いやうであるが、そんな考は御自身では大變偉い心算りであつても少し、考へて見ると餘程愚なそして淺薄な考であらうと思ふ。死と共に消えて了ふのであると考へたならば、胸中に如何なる感が湧いて來るか、一種言ふべからざる寂寞悲哀の感を催しはしないか。順境に處して何の變事にも會しなければ、或は書物や學問から得た理窟で內心の聲を抑へつけてもゐられやうが、扨て一朝書物や學問の理窟も何の役にも立たないやうな事件に遭遇すると、必ずや我れながら心底から湧き立つ寂しさ悲しさを感ぜずにはゐられないであらう。平生理窟張つて偉さうなことを言ふてゐる人間に限つて、一朝事ある時には狼狽へ騷ぐ醜態を演ずるものである。斯樣に死んだら火の消えるやうに消えて了ふといふやうな淋しい心細い考を懷いて世に處して行くことが、果して利益あることであらうか、之れと反對に、未來に對して大なる希望を懷き、光明

淺薄なる死生觀

を認め、大なる愉快を感じ、確固たる安心を有つて居れば、假令如何樣なる變事に出逢はうが、大事の突發に會しやうが、死に關しては更に寂寞悲哀の感は起らない。極く賑やかな至つて樂しい考へが悲しみの中から湧き起つて來る。斯樣な未來に對して樂しき希望を持つてゐることは、世に處する上に如何程の大なる利益があるかといふことを篤と考へて見なければならぬ。未來に關して唯だ寂寞悲哀の感のみであるなれば、最早先きが短いとばかり思ひ、さう骨折つて努力しても仕方がないといふやうな考へが起つて、迚も人生の業務を何處までも勇んで遣り遂けるといふ丈夫な力は出て來まいと思ふ。この故に死と共に消えるといふ考へは一應大變氣の利いた學問でもした者の考へとして偉いやうに見えるかも知れないが、大變愚な、そして又世道人心を頽廢させる思想である。今日は隨分譯の分つたやうで少しも分つてゐない淺薄の考へを持つてゐる者も少なくないので、彼等が人間を毒することは大變殘念である。言ひ換へれば專問の知識は相當にあるのであらうけれども、つまり人生に對して眞摯を缺いでゐる所からウカ〳〵したことを言つて少しも結果の如何を考へないやうになるのである。

松陰先生の死

それにつけても思ふのは彼の有名な吉田松陰先生の死である。

先生程に修養が積めて居れば何時死が襲來しても確かなものであらうが、あれ程の修養は凡人でやれることではない。餘程平生は豪膽な者でも、死罪の宣告を受けたり、今將に死罪に處せられやうとする時になると、日頃の態度がガラリと崩れるものであるが、松陰先生に至つては、死刑の宣告を受けた時も、愈々牢獄から引出されて刑場に行く時も、首を刎ねられた時も、家に居る時と少しも變らなかつたと云ふことである。それは松陰先生程の修養があつて始めて出來るのであつて、先づ通常の人間であれば必ず死に處して迂路付くであらう。斯樣に迂路付くのは、未來に對して大なる希望を懷いてゐないからして胸に一種寂寞の感を起すところに起因するのである。故に吾々常人であつて見れば、どうしても平素から此の未來に對して一の大なる希望を懷く工夫をして置かなくてはならぬ、然ら

ば凡人が如何にして未來に對する大希望が養へるかと言へば、それは宗教の信仰によるより外に途が無い。この點からして彼の死んだら火の消ゆるやうに消えて了ふといふ考は、甚だ氣の利いたやうであつて實は是程氣の利かないことは無いのである。此故に未來に對して希望を懷き、安心を有ち、光を認めてゐる生活は、恥づべき所か、これこそ大に誇つてもよいことである。

現代は何故斯くも淺薄になつたか

然るに未來に對して希望を懷くことを恰も卑窟であるかの如く考へ、そして死んだら火の消える樣に消えて無くなると考へることを大變氣の利いたことの樣に思ふ樣になつた風は、一體何處から起り何が原因してゐるのか能くは分らないが、恐らく德川時代の遺風であるまいか。元來德川時代の學問といふものは儒學であつたが、その儒學も前に述べたやうな眞の正しい實踐とか人生とかを顧慮した學問であるよりも寧ろ理窟の方に傾いた朱子學が專ら流行した。勿論朱子學以外の學問もあつたが、德川氏が政治上の都合からして、所謂林家といふものを幕府の儒官と定めて代々此の學を以て正統のものとして來た。所が林家の學とは朱子學のことであつて餘程理窟走した學風である。それで假令ひ他の學派は色々あつても要するに夫等は內々のものであるに過ぎなかつたから、苟しくも世に出でやうとする者は朱子學を勉强したものである。この故に社會一般の思想としては朱子學の思想が傳播し又流行したのである。その結果武士は皆朱子學を學んで、佛敎を恰も讐仇でもあるかのやうに考へて、無暗に佛敎を攻擊して得意がつたものである。勿論武士以外の社會では佛敎の感化が著しく從つて佛敎の道德によつて支配されたのであるけれども、何を申すも二本差して歩く人間でなければ蛆蟲同樣にしか考へなかつた時代のことであるから、武士が佛敎を排斥するとなれば先づ佛敎が一般に排斥されたと云つても差支ないのである。この變な得意の風が世間一般に及んで遂に佛敎の信仰を非常に卑しいものゝやうに考へて來たらしい。これが明治時代の人間に遺傳して、どうしても排佛流の考が去らないのではあるまいかと考へる。兎

に角吾々に於ては、人生に活動する眞の力は、未來に對して樂しい希望を懷いてゐる處から湧き出でゝ來るものと信じてゐる。

相二地於鏡湖危峯之間一。好花一瓶。名香一爐。
一箇蒲團。一箇鉢盂。佛號數千聲。
華嚴一兩卷。不二亦好一乎。

第六章　儒教的三世觀（横の三世）

横の三世とは何か

前章に於て、一口に三世と云ふても、主として儒教に說くやうな横の三世と、佛教に主として說くやうな縱の三世と二樣の三世があるが、併し儒教でも朱子學のやうな宋學以外のものでは、大抵不明瞭であつても兎に角縱の三世卽ち吾々の生れぬ前の前身及び死後の後身について認めないものはないといふことについて述べた。扨て本章に於ては主として此の横の三世の側について稍々精しく話して見たいのである。此の横の三世に於ては、現に斯くして生活しつゝある吾々之れが卽ち現在であり、父母とか祖父母とか乃至は曾祖父母とか兎に角現在の吾々よりも以前の系統が過去であり、而して自分の子とか孫とか玄孫とか云つた具合に現在の吾々より後に續く系統が未來である。仍て吾々の

現に恁うして生きつゝあるこの現在に向つて如上の過去乃至は未來が如何なる關係を有ち、又如何にそれに對して現在の吾々が心得べきか、この心得方次第によつて今日の吾々の道德上に甚大の影響を及ぼすであらう。啻に道德上のみならず、此の關係とそれについての心得方如何とによつて吾々の處世上に非常な關係を有つて來るであらうと思ふ。今現に生活しつゝある吾々の身體が祖先、祖父母又は父母の身體と關係を持ち、又それの影響を受けてゐるは勿論、吾々の精神乃至行爲の如きものも亦祖先、祖父母乃至は父母の精神及び行爲と切つても切れぬ密接の關係を持ち、又その影響を受けてゐるものであることは爭はれないとであるし、又忘れてはならぬことである。儒教では前にも申した通り此の邊のことを「積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり」と言つて、祖先とか親とかゞ善行を積んだり慈善を施したりして置くと、その餘德が現在の吾々に果報を將來し、之と反對に先祖の人々が惡事をして置けばその餘惡が吾々に影響して禍するものであると說いて、吾々に今日を愼しむべきことを戒めてゐる。されば吾々と祖先とは身體に於ても精神に於ても深い關係があるのであつて、この點を忘れてはならぬ。

先祖と我との關係

然らば此の關係此の影響が現在の吾にどうなつて來るのであるか、先づ惡い側は姑く別として善い方面について見れば、家業が漸次榮えて行き、家運益々隆盛に、又自分の境遇が都合よくなり、或は都合よくならぬまでも格別の不幸も禍もなくして安樂に暮せるのは、抑抑誰れのお蔭であり、何處からさうなつて來たのであるか、この關係が過去に向つての關係である。自分の力で境遇が開かれたのであるか、自分の才能によつて家運が榮えて來たのであるかと云へば、決して自分の力自分の才能だけでさうなつたのではない。自分が唯だ惡事をしないだけで安樂に暮せるのではない、都合よくなつたのではない。然るに現今の人はこの邊に一向氣付ないか又全く忘れてか、兎に角善くなればよくなる程、拍子がよければよい程、自分の力、才能ばかりに目が著いて、たゞ自

分一人で斯くなつたもの、やうに思ふけれども決してさうでない。勿論自分の才もあつたであらう、力もあつたであらう、又勉強努力も助けとなつたであらう、併し自分一人の力ばかりでなく、必ずそれには父母とか祖父母とか或は先祖とかゞ生存中に段々善行を勵まれ徳を積まれたその餘徳が、現在の吾々に現はれたものであることを拒む譯には行かぬ。世間を眺めて見れば、格別の才能もなく格別の勤勉努力もなくして、而かも萬事好都合に運んでゐる人々も少なくないが、是れは父母や先祖の餘徳であるに相違ない。又之れと反對に現在は非常に努力勉強もし又人並優ぐれたる才能を有ちながら、而かもそれ程都合がよくならないばかりか萬事不幸ばかりに遭遇してゐる人も亦少なくない。これは必ず父母とか先祖とかの惡徳惡行が現在の身に餘殃を及ぼしてゐるものであると考へざるを得ない。古人の語にも

問二祖宗之德澤一。　吾身所レ享者是也。　當レ思二積累之難一。
問二子孫之福祉一。　吾身所レ貽者是也。　要レ思二傾覆之易一。

とあつて、實に吾々にとつて親切な教訓であると考へる。先祖が如何程の徳を積んで呉れたか、如何程の善行を勵んで呉れたかは、自分が現在享けてゐる境遇が卽ちその徳澤の現はれである。自分が今日不幸もなく災難もなく安樂に暮せるのは、先祖が善い事をして置いて呉れたお蔭であり、國のため世の爲め善い事をして置いて呉れた先祖の徳澤が今自分に報ふて來たのである。されば自分の境遇のよいにつけ安樂に暮せるにつけて、先祖が是れ程の徳を積むのは中々容易のことではなかつたであらう、その苦勞は竝大抵の事では無かつたであらうと積累の難きを思ふて、益々先祖の御恩に氣付き、そを無にしないやうに心懸けなくてはならぬ。

子孫と我我の關係

次にそれなれば未來に對して卽ち自分の子や孫と、子孫に對しては如何に考へを持つべきであるかと云へば、矢張り先祖に對して持つべき考へを以てせんければならぬ。子が可愛い孫が可愛い、どうぞして子や孫の幸あれかしと祈る心のあるなれば、先づ自分が善事を行はねばな

らぬ、德を積んで置かんければならぬ。自分が今日結構の身分を樂しみ幸福を喜ぶのは偏へに先祖の恩澤の致すところであるから、それと同じく自分も善い事を爲し德を積まんければ、子や孫が善い仕事も出來ぬ、結構な境遇にも暮せない。自分が惡事を行ひ身持ちを崩しては、子や孫が何程一生懸命に精出し働いた所が、迚も立身出世し家運の繁昌する譯はないと、其處に氣付いて深く戒慎しなくてはなるまい。卽ち「傾覆の易きを思はんことを要す」で、家を傾け財産を覆へすことの容易であるを考へて愈々注意しなければならぬ。今一つ古人の語に大變面白いものがある、それは

現在之祿。積ノ自ニ我祖宗一。享受不ノ可ニ過盡一。
將來之福。貽ニ與汝子孫一。節約常使ノ有ノ餘。

と言ふのである。吾々が現に受けてゐる幸福は自分一代に造つたものでなく、先祖代代德を積み善を積み、それが段々重なつて今日の境遇と現はれたのであるから、此の幸福を自分一人で享受し盡さずに多少の餘分を造つて子孫に遺すことを忘れてはならぬ。先祖が遺してくれた福德を假に八分とすれば、自分一人で十分使へば二分の不足を生ずる譯になる。而してその不足の部分は自分で補ふか子孫で補ふか何處かで補はねばならぬ。卽ち何處かで貧乏しなければならぬ勘定になる。若し之れと反對に、先祖より受けた八分の福德を自分で五分か六分使つて、二分なり三分なり子孫に貽すとなれば、必ずそれだけの福德は子孫が受けることになるのであるから、自分がどれ程幸福を受けても、どれ程澤山の財產を有つてゐても、出來るだけ節約して子孫に遺すやうにしなければならぬ。子や孫が可愛くない、どうなつても差支ないとすれば、それまでの話であるが、苟しくも子孫が可愛となれば、自分一人が福德を消費してしまつてはならぬ、贅澤してはならぬ、啻に先祖に對して申譯ないのみならず子孫に對して實に濟まない次第である。一體人間の受ける福德には大抵限りのあり分量のあるものであつて、さう無盡藏に有る譯のものでないのであるから、自分に相應した又自分に定まつたゝけの福分を使ふてゐる間は別段禍も及ぶまいが、その分を過ぎ度を越

すと必ず自分が補ふか子孫が補ふか卽ち何處かで難儀し貧乏に苦しまんければならぬ。從つて昔の人であつて見れば、自分の若い間に折角勤勉し、出來るだけ儉約を守つて福分を使ひ過さぬやうにしなければならぬと考へてゐたものであつた。或は今日の人には斯樣な考は全然無くなつてゐるかも知れないけれども、さればとて斯樣な古人の考へが誤つてゐるとは、どうしても言へなからうと思ふ。

自然界と人事界

現今の學者達は自然界の因果律と道德上の因果律とは全然別箇のものであるとして、彼の佛敎や儒敎の說く因果律は、自然界の因果律と全く異なれる範圍たる人事界卽ち道德上に應用してゐるものであるから謂はゞ方便であつて、因果律そのものとしては何等價値を有つてゐないものであると言ふてゐる。成程今日の學問の理論からはさうであるかも知れないが、併し自然界の因果律と道德の因果律と何等關係なく別箇のものであるからそんなものを信ずるに及ばないとなれば、吾々の道德の實踐に頗る惡い影響を及ぼし惡い結果を齎すであらうと思ふ。儒敎でも幾分言ふのであるが、殊に佛敎に於ては、自然界にある因果律のやうなものが矢張り道德上にも卽ち人事界にも行はれるのであると說いてゐる。之れは只だ立場が違ふまでゞあつて、何も儒敎や佛敎が人に無稽を說いてゐる譯ではない。今日の世間の哲學者とか科學者とか云ふ人々は、人事界の外に自然界といふ一種特別の世界が獨立して存在するものと考へてゐるからして、從つて自然界と人事界とを別々に分けて取扱はねば承知しないのである。然るに佛敎哲學よりすれば、自然界と雖も人事から起つたのであつて、決して人事界を離れて別に自然界なるものが孤立して存在してゐるのではない。佛敎哲學に於ては業感緣起と云ふて、此の天地宇宙間有りとあらゆる物は皆吾々の業感によつて生起するのであると說く。卽ち此の自然界もその根本を推究すれば矢張り人事界から現はれたものであるが故に、人事界を外にして單に自然界といふやうなものばかりを見ることは出來ない。然るに世間の學問では其處まで推し究めないで、自然界に對立した人事界を別に假定した上で、

自然界に行はれる因果律と人事界に行はれる因果律とは全く相違してゐると論ずるのである。一寸聞けば如何にも尤ものやうであるが、深く考へると中々爾かく單純に解決のつくものではない。斯樣に自然界の因果と道德上の因果とを別に分けて了へば、感應の理などは薩張り分らないことになつて來る。然るに感應を全然認めないとなれば、道德と言はうが倫理と言はうが、吾等人間の實踐とは何の關係もない一片の空理空論に歸して了ふのである。故に苟しくも感應の理を認める以上は、自然界の因果は矢張り人事界の上にも行はれるものであることを認めざらんと欲するも認めざるを得ない。

儒教の因果說

儒教の「積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり」とは、之れ取りも直さず人事界の因果であつて、善い事をすれば當然善い報いを生じ、惡事をすれば必然に惡報を受けると云ひ、又「善に福し淫に禍す」と云ふて、陰德は結構であるけれども陰惡は非常に恐ろしいものとしてあるが、若し感應を少しも認めぬとなれば、是等の語は一向意味のない一場の作り話となつて了ふであらう。若しこの感應を棄て、顧みないで、唯だ單に人の見る見ないを標準として行くやうになると、前に述た所謂「橡の下の力持」と云ふ犧牲的精神などの起り得やう筈が無い。之れに反して若し感應が行はれるものであるとしたならば、どうしても積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり、又陰惡に對しては禍あり、陰德に對しては福あるとにならんければならぬのである。自分が善事を積めば、其の善事に對して他方必ず喜ぶ人があり、而してその喜ぶ人の感じは又必ず最初善事を積んだ人の上へ歸つて來る感應のあることは、何も獨り佛敎や儒敎のみの認めるだけでなく、今日の心理學から考へても全然否定は出來ないのである。前にも言つた彼の催眠術について見ても、精神的交通を否定し去つたならば到底その說明は付かう道理がない。恰も木の一端を叩けば木目を傳ふて響が全體に渡るやうに、一方に於て善をなせば必ずそれに對する喜びが他方に生じ、その生じたる喜びは又必ず何處かへ感應せずには止まぬ。卽ち響が木目を傳ふて全體に及ぶ如く、善を行つた者に向つ

ても感應しない譯のあらう筈はない。故によし他人は知らぬにしても、善事を行へばそれに對する善報あり、惡事をすれば又それに對する惡報のあるは當然であつて少しも訝しむべきではない。かく感應が宇宙間に行はれるものとする以上は、人事界の因果律が自然界の因果律と同じであると見て、少しの差支もなければ又何等故爲の方便であるのでもない。

因果を信ずべき理由

然るに若しも今日の或る學者の說くやうに、道德上の因果律は、彼の善い事をすれば必ず善報いあり惡事を行へば必ず惡報ありと云ふ自然界の因果律のやうに正しく定まつたものでなく、唯だ善をすれば自然に心が樂しみ、惡事を行へば自分の精神に苦痛を感ずるのみに過ぎなくて、これこそ道德上の唯一正しい因果律であると說くなれば、或はそれは理論として頗る高尙であるかも知れないが、併し單にそれだけのことであつては、善を爲すにしても惡を止めるにしても甚だ力のないものとなりはしまいか、或は一般の人にとつて頗る道德上の實行力を薄弱にさせはすまいか。人間の中には極く惡いことをしても一向自分の精神上に苦痛を感じないといふやうな者も無いと限らぬ。否横着な奴になると、隨分惡事をして一向平氣で洒々落々としてゐられる者も少なくないやうである。故に善をして心の中に愉快を感ずる人も勿論澤山あるであらうけれども、又中には隨分善事を常に行ひつゝ一向そのために愉快とも別に嬉しくてしやうが無いとも感ぜずに居られる人もあるやうである。故に心に快樂と苦痛とを感ずるといふだけであるなれば、何も別に道德上の因果といふ程のことは無からうと思ふ。兎に角、善事には善報あり、惡事には惡報ありと固く信ずるところが無くては、道德的實踐力は事實に於て甚だ弱められて仕舞ふ。

現今の道德の頽廢は因果撥無に原因す

今日道德は餘程廢つた、力のないものとなつた、陰德を積む者も少なく陰惡を怖るゝ者も稀なる有樣となつた、慈善をするにも心から慈善を行ふ殊勝の心懸けある人は甚だ乏しくなつた。

慈善をするにしても唯だ人目に懸るやうにと計り考へて、人目にかゝらない慈善なれば一向する者が無いやうになつて、社會を擧げて廣告的になつてゐることは爭はれない。卑近の例を取れば、寺社へ神燈を寄進するにしても、無暗矢鱈に一面ベタ〳〵と商賣やら屋號やら甚だしいのになると電話の番號まで書き込んでゐるではないか。寺社は別けて淸淨を必要とすべき神聖の場處であるに拘はらず、斯かる不潔の物を以て汚す心事は實に淺猿ましい次第である。斯樣な一二の例ばかりでない、兎に角社會一般の風潮が廣告的になつた所を見ても、道德の頽廢してゐることは蔽はれない。之れに反して、自分の今日の幸福は先祖の餘德の然らしむるところであつて決して自分一人の力によつたのではないと氣付いて見れば、自然に先祖や父母に對して厚恩の萬一を報謝しなければならぬといふ念が起らんければならぬ。この念が起れば、翻つて自分の子や孫の上を思ふ念が起らざるを得ない。子や孫に有形の資產を遺すと共に、無形の德とか宗敎上の信仰とかを遺してやらねばならぬといふ考が起つて來んければならぬ。

聖人の敎の必要なる所以

扨て斯く言ふと疑問を起す人があるかも知れない。卽ち自分が幸福な人であれば、偏へに先祖の賜と喜びも出やうが、若し自分が別に忘けもしないに貧乏であつたり、出來るだけ正直にやつてゐるに拘はらず事々に失敗ばかり打續いたりする人は、それも先祖や親の不德や惡事の餘殃と考へねばならぬから、さうすると先祖や親に怨こそあれ恩などは無いではないかと言ふ人があるかも知れない。成程一往は尤ものやうにも考へられやう。今日の幸福が先祖の餘慶とすれば、今日の不幸や失敗は先祖の餘殃であることも幾分眞であらう。併しよし幾分それが事實であつたにしても、その場合親を恨んだり祖先を呪つたりしたところが別に自分にとつてどうなる譯のものでもない。否死んだ親に不平を竝べ先祖に小言を撒いてゐた所が、唯だ自分の爲すべきことまでもその爲めに等閑になつて益々不幸に陷り惡い境遇になるばかりであるから、そんな了見は實に愚な考と言はねばならぬ。此處で聖人の敎が必要になつて來る。聖人の敎によれば、さうし

た場合に、死んだ者に向つて愚痴を竝べたり恨んだりして見たつて仕方が無い。それよりもその暇に自分を反省して、自分の今日不幸であるのは自分が前生に於て何か善からぬことをした報いであらう、若し先祖や親が悪い事をした報いであるとすれば、自分が今生に於て再び先祖のやうに悪い事をして置けば、必ず今自分が迷惑すると同じやうに子や孫が迷惑し困難するに違ひないから、子や孫の爲めに出來る限りの善事をしなければならぬ、徳を積まねばならぬと其處に氣付いて來んければならない。斯樣に教へられるのが聖人の教である。聖人の教に從つて自ら反省することもしないで、役にも立たぬ理窟ばかり捏ねてゐたつて仕樣のない話である。そこで教が大切になり又必要になるのである。故に聖人の教訓を能く守り、その教訓によつて禍を轉じて福とするやうに大に力め勵まねばならないのである。かく申しても猶承知しないで、ただ人が善い事をすれば善い報いあり、悪事をすれば悪い報いがあると言ふた處で、一向それは當にもならなければ取り止めた話でもないと愚痴を言ふ人があるかも知れない。

太田錦城の天道説

それについて彼の徳川時代の太田錦城といふ學者は、「天道といふものは春の朧月夜のやうなものであるが、併し聖人君子は其の朧月夜の下に居りながら、晴天白日の下を過ぐるやうな思ひをして行くのである」といふ意味のことを書いて居る。誠に結構な處世上の心得であると思ふ。併し普通の人間にとつては中々春の朧月夜といふやうなボンヤリしたことで合點が行くまいけれども、若し因果の道理を能く辨へ、感應の道理を篤と心得てさへ居れば、何時とは分らないにしても、必ず善因には善果あり、悪因には悪果あることを信ぜざるを得ない。どうしても自分の理窟を振り廻はすことを止めて、聖人の教に聽く素直の心懸けが生ぜんことには迚も修養などは覺束ないであらう。

福翁百話

されば故福澤諭吉翁も「福翁百話」の中に、「因果の大廻り、因果

は大車の廻るやうなものである。善い事をすれば善い報いがあり、悪い事をすれば悪い報いがある。けれども今日來るか明日來るか分らぬ。直ぐ廻つて來るものもあれば又久しく掛つて廻つて來るものもある。けれども何時かは屹度廻つて來るものである」といふ意味の事を言つてゐられる。吾々に於ても常に此の心得を持つて行かなければならぬ。此の心得方を修養して行かないと、一般の人々にとつて道徳の實踐などは迚も出來るものでない。

善の爲めの善

然るに此處に、善い事をすれば善い報いがあるといふ具合に、善い果報卽ち結果の如何に目を著けて、それを目的として善をするなどゝは大變な誤であつて、善の爲めに善を行ふのでなくては道徳でも何でもないと言ふ人があるであらう。如何にもその通りでそれに相違ないが、併し此處で靜かに考へて見ねばならぬ。かく言ふのもそれは人による話で、何人でもそんな事を言ふとなれば矢張り一種の役にも立たぬ所謂屁理窟に過ぎないのである。固より結果の如何などには目もくれず、唯だ專ら善の爲めに善を行ひ得る程に高い修養を積み立派な人格を具へた人に於ては、始めて正しい言であるけれども、人間には種々無量なる階級のあるもので、百人が百人ながら、千人か千人共に同じ程度の人間であるとは言へぬ。從つて道徳上の力にも無數の階級があるから、その階級々々に應じて敎へ、程度に應じて修養して行かなければ畢竟何程高尙の理論であつても一片の空理空論に過ぎないであらう。若し道徳上の低い階級に居る者に、高い敎を持つて行つたならば手の屆くものでない、手が屆かないからして折角結構とは知りながら、普通の人であれば棄て了ふやうなことになるのである。依つて聖人が人を導くには必ず手の屆く處まで行つて引揚げるのである。佛の敎もその通りであつて、階段々々に應じて吾々衆生を導いて下さることは、恰度醫者が病人の病に應じて藥を投ずるのと同じであるから、佛敎に於ては佛を藥王とか醫王とか言ふのである。又導かれる方に於ても充分自分の力を考へることが必要であつて、自分の力、自分の地位を知

ることは、佛道修行に於て一番大切とせられてある。

自己の力を省察せよ

自分が果してどれ程の力のある者であるか實際の價値を知らないと、卑窟になるか或は傲慢に流れるか孰れかにならざるを得ない。未だ悟も開けない者が左も悟つたやうな心持になつてゐると飛んだ間違を生ぜぬとも限らぬ。所謂俗に言ふ天狗のやうに無暗に鼻ばかり高くなつては仕方がない。そこで自分はどれ位の實行が出來るかを能く考へて、自分の出來る事柄からして先づ順序を逐ふて著々實行することが肝要である。聖人君子のやうな立派な方々の修養を譯なく早合點して、その通りを行はうとしても却々行へるものではない、力を測らずして徒ずらに分に外ぐれた高い事ばかり考へてゐても、それは要するに考へたゞけで一も實行とはならないであらう。それであるからして、惡いか卑いかは知らないけれども、先づ通常一般の人であるなれば、どうしてもその結果を目的としその結果を望むのも亦强ち無理からぬことであらうと思ふ。故に斯樣な通常の地位、通常の力を有つてゐる人を導くには、善い事をすれば善い報いあり、惡事をすれば惡い報いありと信じさせるやうにするのが必要であるまいか。

善を樂しむ境涯

斯樣な信念を有つてやつて行けば着々實行も進み、段々善を積み德を重ねて行く中には、何時かは心の中に樂しみが生じて、始めの中結果を目的として實行してゐた者が遂には全く結果の如何を眼中に置かないで、所謂善の爲めの善、德の爲めの德といふやうな高い程度の修養の人ともなるであらう。人間は妙なもので善い事ばかりしてゐると、其の善い事がやがて樂しみになり愉快になり何とも知れぬ面白味を生じて、遂にはその結果如何を省みずして自ら樂しむやうにもなるものである。人に物を施して居れば施された人は大變喜ぶ、所が其の嬉しさうな顔を見るのが慈善をする人々は何よりの樂しみとなり愉快と感じられるやうになる。又生物の命を救ふのは別に他人は喜ばないが、自分獨りで樂しみとなり、他人の難儀を助けるのは此上もない愉快となると云ふ具合に

漸次善を重ね德を積んで來ると、此處に一種の趣味を覺えて、所謂「善を樂しみ仁を樂しむ」境界の人となるのである。此處になれは當初考へたやうな結果如何といふやうな心は一切失せて、眞に善のための善が出來るのである。然るに初めから柄にもつかぬ立派な事を考へて、善の爲めの善だなど、云つた處が、少しも實行とはならないのである。故に自分自分の力を省みて、それに應じた修養を實際に着々實行をすることが吾人にとつては一番肝要のことである。

第七章　佛教的三世觀（縱の三世）

佛教的三世の特色

前章で一通り横の三世卽ち儒教などに說く三世についての心得を說いたから、次は縱の三世卽ち主として佛教の說く三世について述べやうと思ふ。自分が現在斯くあるは啻に親とか先祖とかと關係するのみでなく、自分の生れぬ前きの前生、その前の前々生と云ふ具合に、たゞ此處にある一の生涯だけではない。必ずや段々前の生涯があつたに相違ない。斯樣に過去についてのみでなく、又未來に向つても、假令自分の身體は死によつて灰となり土と化さうが、後の生涯が連續無窮しなければならぬと說くのが佛教である。尤も印度では佛教ばかりでなく、此の種の三世觀を說く宗教も哲學も他に幾らもあるはあるけれども、併し夫等の三世觀は佛教の三世觀とは餘程違つた處がある。大體に於

ては違はないとしても、その理論の根柢に於て相異する點がある。然るに支那に於ては佛教に類した三世觀を說いた宗教や哲學は一も無い。勿論前に述べたやうに未來があるらしいと考へた人々は儒教に於ても澤山あるが、佛教のやうに明瞭に哲學的理論として說明したものは全く無いのである。前に申した通り孔子の心中にはこの考がありつたらしく見えるけれども口へ出しては說かれなかつた。其外莊子にしても列子にしても、時々この考を仄めかしたやうに思はれる節はあるけれども、明らかに說明はしてゐない。之れを要するに支那の學問では佛教のやうな三世觀は說かれなかつたと云つて差支ない。日本の學問も支那から傳はつたのであるから同樣に佛教の意味する三世觀を說いてゐないのは無論である。そこで結局縱の三世觀は佛教獨得のものであると云つて大過無からう。斯く佛教の說くやうに、我々の過去あり未來ありとなれば、從つてそれに對しての特別の心得方あるは勿論である。この心得方が是れより說かんとする三世觀である。

諦らめ

第一自分の前生があり前々生があることを信じて來ると、現在の上に於て迚も諦らめ兼ぬるやうなことについても諦らめを付けることが出來る。この諦らめは吾人が人生に處する上に甚だ大切であらうと思ふ。現在を眺めて見れば、さう惡事をした覺えもなく又平生さう怠けた心算もなく、隨分一生懸命で勤勉もし善根功德も積んだに拘はらず、どうも運が惡くて何をやつても都合がよくないと云ふやうな場合に、自分の前生を信ずることなくして、どうして諦らめがつかうか、胸が安まらうか。外の人を見ると、左程善い事をしたらしくも見えず、左程勤勉であるやうでもないが、而かも始終運がよくて何をやつてもトン〳〵拍子に行く、家內全體が無事でもあれば不幸も無い、益々具合がいゝといふ人間も隨分ある。そこで自分を是等の人々に較べると、どうしても胸が休まらない心が靜まらない。どうして自分だけはこんな運命に苦しまんければならぬのであらうか、正直にしてゐたところが畢竟馬鹿を見るのではあるまいか、四角四面の事ばか

りしてゐても詰らないと段々變な考が起つて、遂には今迄やらなかつたやうな惡事を始めたり、行狀を崩したりする人も世には尠なく無い。果ては精神の狂ふ者さへ出て來る。

天道是乎非乎

古人の言つたやうな「天道是乎非乎」と叫びたくなる。是等は皆前生のあること、前々生のあることを知らない又知つても信じないからである。之れが若しも過去に眼を著けて、現在受けてゐる境涯は前生に於いての自分の所作の報いであると分るやうになれば、假令現在の境遇が如何に惡からうと其處に諦らめを附けることが出來るのである。

米國婦人の歸佛

二十餘年前であつた、名は忘れたが、或る米國の婦人が印度から廻つて日本へ漫遊したことがあつた。勿論耶蘇教國に生れた人であるから舊は耶蘇教の信者であつたが、印度へ行つて段段佛教の事を研究もし又話も聞いて教理が分るやうになり、耶蘇教で不滿足を感じてゐた人であつたが、遂に佛教に改宗した。其の人の話に、身の上について甚だ不安があつたので、永い間耶蘇教や西洋哲學やその外倫理學を研究もし信仰もして見たが、どうしても身の上について諦らめが附かなかつた。然るに佛教の三世觀を聞いて初めて永い間の胸の煩悶が去つて安心出來るやうになり、今はスツカリ諦らめが付いて誠にい、氣分になつてゐると非常に喜んでゐた。この婦人のやうに自分に前生、前々生なるものがあつて、その前生、前々生に於て爲した處の結果が今日報ふて來たのであると考へると、何事についても諦らめて行けて誠に安心の生活を送れるのである。又未來に對してもその通りで、今日の行爲はその儘無くなつて了ふのでなく、若し今日勉强を勵み仕事に骨折り儉約を守つて置けば、決して死後と雖も無駄になりはしない。此世に於て爲したる事は決して死と共に消失するのでなく、必ず自分に返つて來るに違ひないといふ信仰を有つてゐるなれば、假令如何なる些事と雖も等閑に出來やう筈なく、事々に一生懸命とならざるを得ぬ。然るに此の身體は親によつて始めて出來た

ものであり、墓地の下になればそれで消え去るものであり、前生もなければ後生も無いと考へて居れば、種々の問題が心中に生じた時に、如何にするも諦めることも出來なければ、又未來の爲めとして現世に於て努力奮闘することも出來なからうと思ふ。

自己の本體は宇宙大

然るに此處に人あつて、縱の三世を立て、前生あり未來ありとせば甚だ結構であるに違ひないが、併し言ふところの前生或は未來が果して眞實に在るものであらうかと言ふ人があるかも知れない。其の不審は尤もながら、此の點に關しては佛教哲學が隨分力を注いで精密に說いてゐるのである。今此れを仔細に說くことは迚も此書で能くするところでもなければ又目的とするところでもない。併し大體未來があるか過去があるかと云ふについては、先づ吾々の身體の何故に此處に生じたかゞ分れば容易に了解出來やうかと思ふ。抑々佛教哲學よりせば、天地宇宙一切の物は一つも異つた物なく悉く同一であることは、恰も海全體に亘つて同一水が湛然として瀰蔓してゐるやうなものである。

宇宙間有りと有らゆるものは同一物に外ならないが故に、從つて又吾々自身の本體も宇宙間に充ち滿ちてゐるのである。

宇宙大の自己が何故現在の如く、現はれたるか

然らば天地宇宙間に充滿してゐるやうな大きなものが、何故五尺の身體、百年未滿の生命となつて現はれてゐるのであるか、天地に充つる體となつて現はれさうなものであるのに、何故吾人のやうな小さい極めて僅かなる生命となつて現はれてゐるのであるか。之れに對して一言で答ふれば、因緣である、吾々は因緣によつて現はれ出づるからであると言はねばならぬ。然らば因緣とは何か。是亦一言で答ふれば、吾々の心に然か現はれ出づべき習慣が付いてゐて、その習慣の力よりして、斯く微々たる身體、斯く叟忽なる生命を有つ者として現はれたのであると言はねばならぬ。其の習慣の力とは抑々如何なるものであるかと言へば、此の五尺の小身、五六十年の短命を以て自分であると考へる習慣が心に染み著いて寸時も離れないそのことである。

渦の内と外

彼の大海に生ずる渦を看よ。渦の内の水と渦の外の水とは全く異つたものではなく、一つの海水に過ぎない。其の海水が其處に唯だ一の圓輪を形成したゞけ、一の勢力を與へたゞけのことである。然るに渦が形成されれば、渦の内の水と渦の外の水とは全然別物となつてしまふ、吾々が又之と同じく、本體から言へば別に宇宙と異なるところなく、平等にして廣々と何處までも果てしなき無限のものであるけれども、その無限の中に於て或る小さいもの或る有限なるものを以て自分であると考へるやうになつたのである。而して此の習慣力は中々強いものであるから、全くそれ以外のものとは別の物のやうになつて現はれ來たのである。是れ差別の生ずる根本である。尤も佛教よりすれば、獨り人間に限らず人間以外の總ての動物も亦さうであつて、其の習慣が何時までも連續して行くから種々の種類となつて現はれ出づるのであると說くのである。能く考へれば分ることであるが、心は形を有つてゐないけれども至つて力强いものであつて、何か一つ思ひ込んだら中々取れるものではない。例へば夜道でもして非常に氣味惡く感じつゝ怖々歩いて居て、フト人に出逢ひ、それを以て一旦妖怪でゞもあるかの如く思ふと、縱から見ても横から見ても人間とは思へないで、どうしても化物としか見えない。恰度このやうな具合に、吾々の心は一旦何ものかに執着すると、中々それを思ひ切れない。前の人間を化物と思ひ込むやうな場合であれば、翌日にでもなると心の勢であつたと氣付くのであるけれども、我々が此の身體と此の生命とを以て自分であると思ひ込んでゐることは中々そんな具合に行かないばかりでなく、晝夜寢食の間と雖も忘るゝ暇がない。此の自分といふ考は平生心の奥に潜んでゐて左程氣付かないやうであるけれども、今言つたやうに實は不斷に吾々に撚りを掛けてゐるから、恰度海中に渦の生ずるやうに其の本體は極めて大きいのであるけれども、五尺の身體五六十年の生命のみを以て自分であると思ふ習慣力に依つて、遂に現在の吾々のやうな微小なる人間となつて現はれ來たのである。

業の力

之れを佛教では業力の作用とも云ふのである。佛教の所謂業とか業力とか言ふものは、世間の語にすれば行爲と云ふことに相當する。此の業力即ち行爲の力が、自分と云ふ小さい習慣を彼方に動かし此方に動かし、都合の善い方へ動かしたり都合の惡い方へ押し出したりする。即ち善い行爲をすれば善い方へ押出し、惡い行爲をすれば惡い方へ押出して來る。故に此の小さい身體でありながら種々樣々な身體を受けて來るのである。或は人間以下の動物とも現はるれば、或は又人間以上のものともなつて現はれるのである。人間以上のものに現はるゝためには、善い行爲をすることによつて、自分といふ小さい心の習慣を漸々大きくし、善い方へ押し出して行けばよいのである。斯樣にして人間の境涯より菩薩の境涯を現はすことも出來れば又佛の境涯に進むことも可能である。若し此の心の習慣力に何の變動をも加へないならば、此現在の狀態を永く連續せんければならぬ。仍て人間以上の境涯に進むために、心の習慣力に變動を加へるのが佛教に所謂無我の修行と云ふことである。斯く無我の修行を積むことによつて遂に小さい自分といふ考を止めて了ふと、恰も渦の内の水と渦の外の水とが一緒になるやうに、吾々の此の五尺の身體五六十年の生命によつて束縛され限定せられてゐる心が、宇宙大の體と無限の生命とを有つた心となるのである。

坐禪觀念

扨て斯樣に前身あり後身あつて、過去を振返れば其處に無限の前身あり、未來に向つても限りなき後身があり得ると言はねばならぬ。然らば如何にして前生あり後生あるかを知るためには、現在の自分の由來を見究める必要がある。即ち吾々の現在が斯く現はれたのは、所謂煩惱、業の因緣によつたのである。かく申せば、それは唯だ佛教の上で勝手の理論を作つたのであらうと言ふ人があるかも知れない。元來印度に於ては、釋尊の御出世以前より、坐禪觀念の修行即ち精神を鍛錬する側が非常に發達してゐた。されば佛教に於ても、此の精神の鍛錬には非常に意を用ひたのであつて、既に釋尊御自身が